

---

# 周承伝 - 剣鬼が往く -

風雅

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

周承伝 - 剣鬼が往く -

### 【Nコード】

N4883W

### 【作者名】

風雅

### 【あらすじ】

大陸各地で噂される剣鬼と名高い男、周承。

この物語は彼の生涯を描く壮大な物語・・・だったらいいなあ。

## 1 話（前書き）

感想やご意見などありましたら是非とも。

## 1話

時は後漢末期。どこの地も荒れ果てていたところで賊が出没するそんな時代。官は賄賂によって売買され、有力な豪族はその地の太守に賄賂を送り己の地位を守ろうとする。

そのための金を民たちから搾取し、民はどんどん飢えていった。

飢えることで人々は仕方なく賊に落ち、大陸は麻のように乱れ、商隊が護衛なしで荒野を歩こうものなら必ず賊に襲われるというおぞましい世界になっていた。

荒野を進んでいくこの商隊は護衛を雇う金がなく、仕方なく賊が最もでてこないという土地を進んでいた。

しかし、運命とは皮肉なものでこういう時にこそ賊というものは現れるのである。

賊に見つかってしまった商隊はすぐさまきた道を引き返し逃げようとした。

だが、賊のほうが機動力では上であつたようで、先ほどまで四里はあつただろう距離はすぐにあと二里といったところにまで近づかれていた。

先ほどの賊の集団と少し離れた場所にある崖の上。そこには背中に剣を背負い、黒い外套をまとった男が立って賊と商隊の様子をみていた。

「やれやれ……。どうしてこうもまあ暇な人間が多いのかね」

眼下に並ぶ賊の集団を眺めながら男は溜息をつく。

「しかしまあ、それだけ国が乱れているということなのかね」

男は崖から飛び降り、商隊のもとに向かって走っていく。男は商隊の先頭の男に告げた。

「このまままっすぐ走り続ける。アイツらは俺が足止めする」

商隊の男は驚き男を引きとめようとするが、そこには既に男はいなかった。男は商隊の荷馬車の脇を走り抜け、賊の集団の前に立ちはだかった。

賊たちは男が商隊の後ろから出てきたのを確認すると下卑た笑みを浮かべながら男に向かって言った。

「兄ちゃんよ、俺たちはあの商隊を追ってたんだ。そこをどいて有り金全部よこせば命だけは助けてやるぜ?」

ああ、やはり賊なんて言うのは所詮こんなものか。

賊の言葉を聞いた男は背中に背負っている剣を抜きながら目の前の賊に答えた。

「脅すことしかできないような雑魚にくれてやるような物は持ちあわせていないな」

その瞬間、賊たちの顔が真っ赤になり、そのまま男に向かって突撃してきた。

「我が名は周承。国の乱れに踊らされし哀れな者共よ。我が魂切を持ってお前たちに安らかなる眠りを与えてやるう」

男は抜き放った剣を構え、賊の集団にむかつて駆け出した。

隊商の男は賊の集団に向かていった男の方を立ち止まって見ていた。それは賊の集団に一人で向かわせてしまった後悔のせいなのか、それとも人間としての自責の念があったのかはわからない。

だが彼は他の商隊の仲間が逃げていく中で一人立ち止まっていた。

無謀にも賊の集団に向かっていった男の事が彼は気になって仕方なかった。

少なく見ても二百は居るであろう賊の集団に臆することなく立ち向かっていった彼に尊敬の念と共に申し訳なさでいっばいだった。

だが彼には賊の集団の暴力に抗う術はなく、何かしらの力があるわけでもない。

何も出来ない彼は拳を握りしめ唇を噛み締めていた。

口の中で鉄の味がした。

自分には見ていることしかできない、彼はそんなことを思いながら賊の集団に向かっていった男を見ていた。



賊の集団に突撃した周承は向かってくる賊を斬り続けた。腕を、脚を、首を斬り、人間としての機能と命を尽く奪い去っていく。

血にまみれながらも、剣を振り続ける彼は至って冷静だった。彼に焦りや興奮の兆しはなく、ただただ剣を振るい続ける。

その姿は宛ら鬼のようで、どんな敵つい男も一刀のもとに斬り捨て続けた。

一振りすれば腕が飛び、二振りすれば脚が飛び、三振りすれば首が飛び、彼の通ったあとには血溜まりと血の噴水が残るばかりだった。

所詮は賊の集団。周承の前では赤子の集団であるかのように切り続けられ遂には二百はいたであろう集団もわずか十人ほどになってしまっていた。

「た、助けてくれ!!」

その言葉を最初に発したのは誰だったのか分からないが、その言葉を皮切りに賊の集団はすぐさま周承の目の前にひれ伏し命乞いを始めた。

嗚呼、なんと醜いのだろうか。今まで相当数の命を奪ってきたはずだというのにそのことは棚に上げ、自分たちの命だけは助けてくれという。

人の本性などというのはこうも醜く、そして情けないものなのだろうか。

しかし、それも仕方なきこと。

本来、彼らの殆どは食べることに困り飢えた農民である。それが日々の糧を官に奪い取られ、普通に暮らすことができなくなった為に仕方なく行っていることなのだから。

だが、一方で人の命を奪っていることもまた事実。

それは決して許されることの無い行為であり、人としての尊厳を失い畜生道に堕ちたことと同義である。

人が一度畜生に堕ちてしまえば、そこから立ち直ることは難しい。

戻れぬならばいつその事・・・彼はそう考えていた。

故に命乞いをしようとも、彼は剣を振るうことを止めない。止めることはできない。

すべては、己の信念故に・・・。

そして、最後にその場に立っていたのは剣についた血を拭う周承、ただ一人だった。

## 2話（前書き）

2話です。連続投稿は何時まで持つのでしょうかねえ・・・。

## 2 話

大陸の南東に位置する場所、揚州。そのとある村に彼は住んでいた。決して裕福とまでは行かないが、日々の糧に困ることはなく人々は平穩に過ごしていた。

こんな時代に平穩に過ごせているのには当然、理由がある。

この村には賊から人々を守れるだけの武力をもった者がいるからに他ならない。

村のある一角に少しばかり大きな家がある。その家の近くに家は立つておらず、家の裏手には大きな山があった。

この家の家主の名は周承といい、村の平和を守るのに一役買っている男である。

そんな彼だが、現在は旅に出ておりこの家には彼の妹である周泰が住んでいた。

彼女もまた、周承と同じく村を守る者の一人である。

彼女自身はそこまで力があるわけではないが、彼女には得意なことがあった。

彼女の背は低いがその分小回りが効く。それを有効に利用し、賊の攪乱を行うのに適していた。つまりは工作である。

たかが工作とは言うがその工作一つで賊などというものは軽く潰せてしまう。

例えば賊たちが村の近くで襲う前に野営をしたとしよう。かれらは所詮賊であるから、見張りは立てても酒宴を開き、夜も遅くまで騒ぎ立てる。

そこに例えば兵糧に火をつけ、官軍が来たなどと吹聴し、何人かの兵を殺してしまえば賊の士気は大いに沈み、混乱の果てには裏切り者が居るなどして同土討ちである。

少数の賊であれば、彼女自身の武をもつてすればたやすいことである。

周承がいたときには工作などせずに彼女と二人で賊を全てなぎ払っていたそうだが、それは余談である。

兎も角、これだけの功績を上げている周兄妹は村の周囲では「剣鬼の周承・隠密の周泰」と呼ばれ、賊共も最近では全く襲ってこなくなつた。

そんな噂を聞いてきたのか彼らのもとには様々な太守が仕官を求めてやってきた。

だが、彼らの目に叶うような太守は居らず、その全てを断り続けた。

それから数年立って、突如周承は旅に出た。理由は簡単なことで、仕える主を探しに行くのだと言う。周泰は当然付いて行くと云ったが、彼はそれを認めなかった。

曰く、自分たちが二人共村から出たら誰がこの村を守るといつのか。今はいいかも知れないが自分たちが旅をしている間に賊が村に攻め込み、この村が滅んでしまえば、自分たちは故郷を失い、さまよい歩くことしかできないのだぞ、と。

周泰はその言葉を聞き、仕方なく付いて行くことを諦め村に残った。

周承も周泰には自分しか家族が居ないということを理解していたらから、なるべく早く戻ると告げて旅に出た。

そして、周泰は今も一人でこの村を守っているのである。

兄上が旅に出て早いものでもうすぐ一年になる。

私は兄上が言われたとおりこの村を守り続けてきた。早くに両親を亡くし私と兄上だけで暮らしてきた私たちは何時も一緒だった。

生き抜くための糧を得る為に働き、時代の暴力から身を守る為に武を磨き、生きて行くために人を殺す覚悟を決めた。

私が迷ったときには、兄上が先へと導いてくれた。

私が道を誤った時には、兄上が正してくれた。

私が兄上に依存しているのは事実だろう。実際のところ、今も不安で仕方が無い。

だけど、兄上の信頼を裏切らないためにも私は今日も村を守るために鍛錬をする。日々の鍛錬によって培われた武は決して自分を裏切ることなど無いからだ。

さあ、今日も一日がんばろう。そんなことを考えていると、村の男が叫びながらやってきた。

「ぞ……賊がきたぞー！！」

その瞬間、私は叫び返した。



「見張りはどうしたんですか！」

「わからない。どうやら最近襲撃がなかったから怠けていたみたいだ」

「なんということを……。すぐに戦える人を集めて下さい。私は先に出て足止めをしてきます！」

「けど、相手は今までの数なんてものじゃない！二百は居るんだぞ！」

「だからといって何もせずに村を襲わせると言うんですか！抵抗しなければ殺されないなどといことはありえません。戦わなければ奪われる、それが今の時代なんです！」

私はそう叫ぶとすぐさまかけ出した。幸い、鍛錬をしようと思っていたから武器は手に持っていた。

村の入口からすぐさま外に出てみると、そこには今までとは違うほどの数の賊たちが向かってきていた。よく見てみると商隊を追ってきているらしい。商隊は私たちの村に逃げ込む腹づもりのようだ。

ふぎけるな。なぜ、お前たちの尻拭いを私たちの村がしなければならぬ。そう思ったがそんなことは今はどうでもいい。とにかく今は賊の足止めをしなくてはならない。

私は覚悟を決めて賊に向かって走って行こうとしたが、商隊のすぐ近くの崖から誰かが飛び降りて商隊の脇を走っていった。背中に背

負った剣をみて私は気づいた。

嗚呼、兄上が帰って来られた、と。

兄上

はそのまま全ての賊を斬り捨てられた。最初は私も助太刀しようと思っていたが、動けなかった。兄上が賊を斬る姿が美しく見えたからだ。

賊を全員斬り伏せ剣についた血を賊の布で拭うとそのまま鞘に収め、私の方へ向かって歩いて来た。

「ただいま、明命」

私は涙を流しながら兄上のもとへ駆け出していた。

## 2話（後書き）

周承：本来は周泰の息子ですが本作では周泰の兄ということになっております。

### 3話（前書き）

感想がいただけるといふのはやはり作者冥利につきますね。今後もよろしくお願いいたします。一日一更新運動二日目になります。

### 3話

妹である周泰と再開した周承は二人で村へと戻った。

二人が村に戻ると周承の存在に気づいた村人たちは宴の準備を始めた。

なんといつても村の英雄の帰還である。それも二百はいたであろう賊達を二人で撃退したのだからその喜びも一人である。

「しかし、ここまで大きな宴をするほどの食料はうちの村にあったのか？」

周承の疑問も最もである。彼が出ていくまでは村の食料は日々を過ごすのにちょうどいい程度で、決して余りあるほどのものではなかったからだ。

だが、そんな疑問も周承が村に入ってみればすぐに解決した。

村は昔と違い大きく発展していた。各地を歩いてきた彼からすれば、この村の畑の様子に驚いてた。だが同時に、これだけ畑の実りが豊かであるなら大丈夫なのだろうと理解した。

「兄上が旅に出られてから、多少は賊達も襲ってきましたがそこまでの数ではなく私だけで撃退していましたので村がほとんど荒らされることはなく、畑の実りも良くなりました」

周泰のそんな言葉に周承も納得した。確かに賊たちが攻めてきても、村の若者たちが立ち向かって戦わなければ当然、疲弊しない。

そうなれば村で働く若者たちも怪我をせずに畑の世話に精を出せる。つまり畑の実りが豊かになる。

しかもこのあたりの太守は賊に襲われた際にすぐさま逃げ出してしまい、今では食料を搾取しにくる阿呆が居ないので村の食料庫は潤っているのだ。

これは、ある意味では賊に感謝しなければならないのかも知れない、などということを考えながらも彼らは自分達の家に向かった。

久しぶりに帰ってきた我が家。妹は覚えていないだろうが自分たちの両親が残してくれた財産。それがこの家と周承が持つ剣なのだ。

彼らの両親もまた武に秀でており、当時の太守に仕えていた。しかしある時、中央から新しい太守がやってくるとそいつは前太守に仕えていたもので自分に従順でないものを処断し始めた。

新しい太守は民から財を搾取し、己の私腹を肥やすだけの暗愚であった。両親はそんな太守の様子をみて諫めようとした。だが、太守は自分の思い通りにならないのが気に入らないのか二人を処断しようとした。

流石の両親もそこまでする気だとは思っていなかったらしくすぐさま出奔した。そして農民に身をやつし、この村に住み始めた。

両親は武官であつたので畑を耕すこともあれば、賊から村人を守つて暮らしていた。

何年か経つて、両親は二人の赤子を授かった。それが周兄妹である。ある時、村に搾取にやつてきた太守の側近が二人の事に気づき、村の長に二人を差し出すように指示した。当然、太守からの命であるため二人は長に出ていくように言われた。だが、両親は長に頼んだ。俺たちが処断されるのは仕方ないことだ。だがこの子に罪はない。だからどうか、この子たちをこの村で育ててあげてほしい。

長は二人の頼みを聞き入れ彼らの二人の子を預かった。

両親はそのまま太守に首を刎ねられた。だが、周兄妹はそのことは知らず、二人は流行病で死んだと長に聞かされていた。

周承は旅に出てから今までの村の様子について周泰に聞きながら歩いていく。話も終わろうかという頃に二人は家についた。

「さて、久しぶりの家だ。宴は夜からだと言っていたし、今のうちに休んでおくことにしよう」

「はい。お疲れ様でした、兄上」

周承は剣を背中からおろし寝台に寝転がった。周泰も自分の寝台に腰掛けた。

「兄上、旅はどうでしたか？」

周泰が周承に問いかける。

「一年足らずだったからな、そこまで色々とまわれたわけではないが主に北の方を廻ってきた。青州、幽州、并州、冀州、司州、豫州と廻ってみたがやはり司州の洛陽や豫州の陳留は治めている太守が いいのだらう。他の地とは見違えるほどに豊かだった」

「では、そのどちらかに仕えるのですか？」

「どうだらう。その土地の太守に客将として雇ってもらいはしたが今ひとつ心を打たれなかった」

「そうですか……。ですが、兄上にならきつと素晴らしい主君が見つかるはずですよ！」

周承は苦笑しながらも妹に、そうだな、と返しそのまま目を閉じた。

周泰もそんな兄の様子を見て、家を出て宴の準備を手伝いに向かった。



賊が出没するという報告を受けた為、その確認と討伐の為に僕は兵五百を率いて建業から会稽へとやってきた。

堅殿の命でやってきたわけだが、どういうわけだか賊が見つからない。普通ならば谷間や洞穴の中に根城を作り、そこに閉じこもっているかどこかを襲撃して民から財や食料を奪っていく。

しかし、そんな噂を近くの村で聞くこともなく、むしろ聞く噂といえば剣鬼と隠密の噂ばかり。

建業から南東に位置する街、会稽。その近くには剣鬼と隠密の二人が守っている村があるという。

しかし、所詮はたかが二人。噂には尾緒がつくものである。おそらくは少数の賊が来たときに戦って守ったというだけだろうと思っていた。勿論、少数とはいえ賊の襲撃から村を守るほどの人材であれば、鍛えることで一廉の将となることもできるだろう。

もし、合う機会があるのなら仕官を進めてみるのもいいかも知れない。僕はそんなことを考えていた。

会稽に到着した私たちは賊の情報を集めることにした。いくら報告で賊がいたと確認されても、堅殿が建業に来てまだ日が浅い。賊の居場所がきちんと確認できていないのだ。

「その者、少し良いか」

僕は道行く男を引き止めて賊の情報を聞くことにした。男は僕の声に足を止めるところこちらを向いて返事をした。

「なんでございましょう」

「ここらを荒らしまわっておる賊のことを聞きたいのじゃが、何かしらぬか？」

男は少しばかり考える素振りを見ると、すぐにこう言った。

「賊なら、先ほど商隊を襲っている最中に討伐されたと聞きました  
が」

「・・・は？」

最初はこの男が何を言っているのか分からなかった。いくら居場所の情報が無いと言っても数の情報ぐらいはこちらにも聞いているのだから。

「二百はいたと聞いておるが・・・本当に討伐されたのか？」

「ええ。あなたも聞いたことは有りませんか、【剣鬼の周承・隠密の周泰】の噂を」

ここで、その名前が出るか。

「その噂は本当なのか？如何せん、儂らは最近赴任して来たものでな。こっちの噂には疎くてな」

「そうでしたか。【剣鬼の周承・隠密の周泰】と言えば、このあたりでは知らぬ者は居ないでしょう。ここから南東に凡そ十里ほど行けば、彼らの住む村につけるはずです。そこに行けば確認が取れるかと」

まさかこんな近くにあやつらがあると。儂は驚きながらも同時に期待に胸が膨らんだ。今の堅殿には少しでも多くの人材が必要なのだ。たとえその噂が偽りであつて、賊が討伐されていないとしてもその時は儂らが討伐すればよい。

それに、火のない所に煙は立たぬ。彼らもおそらくはそれなりの実力があると見て間違いないはずじゃ。

もし本当に、二人で賊を討つたのなら必ずや連れ帰らねばならぬ。そのような英傑こそが今後、我らには必要なのじゃから。

「そうか、感謝するぞ若いの」

「いえいえ。道中、お氣をつけて」

そう言つて男は私のもとから去つていった。

さて、儂らも行くとするかの。街で別れた策殿をさっさと見つけて  
こなくてはの！

### 3 話（後書き）

1 1 / 9 / 1 6 : 細かい設定を変更 孫堅を建業の太守へ

#### 4 話（前書き）

展開が読まれやすいのは作者の力量不足故にご容赦を。感想はやはり執筆の原動力なのだと再確認中です。一日一更新三日目です。

## 4話

祭と一緒に会稽までやってきた私は、すぐに祭と別れて酒家に向かった。酒家に入ってお酒を頼むと、席座って周囲から聞こえる声に耳を澄ましていた。

どこからか剣鬼という単語が聞こえてきたので、そちらの方を向いてみた。どうやら、男が三人ほど向い合って座って何やら話をしていたらしい。商人かなにかだろうか、私は話しの内容に興味を持ったので少しばかり耳を傾けた。

「なんでも、剣鬼と隠密がまた賊を倒したらしいぞ」

「彼らは本当に俺たちの守り神だな」

「だけど、今回も賊は一人も逃げ出せなかったらしいぞ」

「二百はいたんだろう。誰も逃げ出せないなんてことがあるのか？」

「そこは流石の剣鬼と言ったところさ。賊を全員斬り捨てたらしいぞ」

「おお！そいつはすごいな。二百人を一人で打ち倒すなんて」

「だけど、その力が俺たちの方を向いたらと思うと恐ろしいよ・・・」

「そんなことがあるものか！俺は彼らに合ったことがあるけど、人

当たりの良くて気作な奴だったぞ」

「なら大丈夫だな！」

剣鬼、か。その噂なら建業にも伝わってきている。

曰く、彼の住んでいる村に向かってきた賊で生きているものは居ない。

曰く、人に対する容赦はなく、向かってくるものは全て斬り捨てる。

曰く、普通の剣よりも遙かに長い剣を背負い、身に纏う服は黒色に染められている。

曰く、女のように長い黒髪をしている。

色々な噂がある。実際のところはどこまで本当なのか分からない。普通の民が賊とはいえ向かってくるものを容赦なく、それも全員殺すことなど出来るのだろうか。

できないことは無いのだろう。実際、私だってそれくらいのことはできる。そのくらいと言っても、私だって躊躇いはする。

賊とはいっても元々は農民であるものがほとんどだ。それも時代に流され、否応なくなつたものがほとんどなのだ。それなのに情け容赦なく斬り捨てるというのは、最初は抵抗があった。



何度も何度も戦場に赴き、何人もの首を斬り、返り血を浴び続け、ようやくのことで覚悟が決まった。

だというのに、はじめから全ての賊を斬り捨てられるような人間が居るのだろうか。

私は少し、剣鬼と呼ばれるものに興味を持った。

酒を飲み終えて酒家を出ようとした時、外から叫び声が聞こえてきた。何事かと思つて外に出てみると賊が人質をとつて村人を脅しているのが目に入った。

「誰でもいいからはやくここの太守を呼んでこい！じゃないとコイツの命はないぞ！」

正直言つて阿呆かと思つた。ここの太守はとうの昔に逃げ出しており、呼んで来れるはずもないのだ。こんな阿呆は無視しておきたいのだけれど、流石に人質がいるのにそんなことはできない。

私は賊を警戒させないように静かに歩いて近づく。その途中で近くにいた人に、赤い服の兵隊を呼んできて、と頼み賊の前に出た。

私は賊に向かって言つた。

「ここの太守はもう居ないわよ。前に襲つてこようとしたあんたたちの仲間に怯えて逃げ出してしまったのだから」

賊は私の声を聞いて、こつちを向いた。

「そうか、太守は居ないのか。だったら金目の物と馬を差し出せ！」

賊の要求が変わった。だが、そんなことは関係ない。今の私がすべきことは老人を助け、あの賊を無力化すること。そのためにはこの賊の注意を引き続けなくてはならない。私たちが連れきた兵隊が来るまでの間。

「わかったわ。貴方の要求するものは準備する。だから、そのお爺さんを解放しなさい！」

「騙そうったってそうは行かねえ。俺が爺を放した瞬間首をはねるつもりなんだろう？ 孫伯符さんよ！」

少しばかり驚いた。まさかこんなところの賊が私の顔と名前を知っているなんて。

「あら、私の名前を知ってるの？ 賊にも名を知られるようになるのは、私も有名になったものね」

「そうでもないさ。あんたはこのへんの賊からすれば有名人だよ、俺たちを狩る者としてな！」

「賊なんてものは狩られて当たり前でしょう。人をやめて、獣に堕ちた畜生共が！」

「お前に何がわかる！食う事に困り、生きることになった俺達の何がわかるってんだ！」

「分からないわよ。私はそんな経験したこと無いもの。でもね、これだけは言える。人を殺めてまで得る生活の糧など、米粒一粒ほどの価値も無いということぐらいはね！」

私は賊にむかって叫ぶ。畜生になってまで生きる価値など無いということを。だが、それは火に油を注ぐ結果となってしまうた。

「五月蠅い！お前らはさっさと俺の要求通り、馬と金目の物を渡せばいいんだ！」

賊が老人を抱き寄せて剣を突きつける。老人の目は恐怖に彩られ、私はどうしたものかと考える。流石にこれ以上は不味いと思い、賊の動きに注意を払っていた。

声をかけた男が雑踏の中に入っていくのを見届けたあと、儂は近くで聴きこみをしておった兵に全員をまとめるように言い、策殿を探すことにした。

策殿が行きそうな場所などは凡その検討がついている。おそらくは酒家にでもいつて酒を飲んでいるのだろう。まったく、若かりし堅殿そっくりじゃ。何かあれば酒を呑み、政務を放り出して、親友の冥琳に怒られることもわかっておるのに酒を呑む。まったく、孫家の人間は無類の酒好きばかりじゃ。

兎に角、策殿の居場所にめぼしの立った儂はすぐに酒家に向かった。少しばかり早足になり、道行く人々に道を開けられながら進んでいたが、儂は決して怒っているわけではない。

この儂でさえ酒を呑むのを我慢しておるのに策殿だけ呑んでいることに嫉妬しているわけでも無い。そう、この黄公覆がそのようなことで怒りや嫉妬を顔にするようなことは断じてないのだ。そう、断じて。

閑話休題。

酒家についた儂は中に入って探したのだが策殿は居なかった。ここに居ないとなると街を歩いているということになるのだが、ここに来てどうにも嫌な感じがした。

こういう時に感じる嫌な感覚はほとんどの場合で当たる。こんな時は当たらなくてもよいというのに。無駄に武官としての感覚が研ぎ澄まされるということなのだろうか。

とりあえず酒家をでて街を歩いていると、少し開けた場所で人だかりができていた。面白そうだな、と思いその人だかりに向かっていった。

人だかりをかき分けて中に入ってみるとそこには策殿と、賊らしき男がいた。男は老人を人質にとっており、策殿も手が出せないようであった。

儂はすぐにその場から離れ、見晴らしの良い屋根にのぼり、弓を構えた。男は策殿に集中しているらしく儂の方は向いてない。

今なら頭を射抜けるかと思ったが、賊は老人を抱き寄せて剣を突きつけた。老人が男に近すぎるため儂は弓を引くことが出来なかった。

上から見ていたのが良かったのか、賊の背後に誰かが忍び寄っていた。かなり見事に気配を消しながら賊の後ろをとっていた。

なかなかの気配の消し方に儂は舌を巻いたが、今はそんなことを考えている場合ではない。ともかく、儂はそやつの行動に注意を向け

ていた。

完全に背後をとった瞬間、そやつは賊の首筋に手刀を放ち見事に気絶させていた。

近くにいた策殿はすぐさま賊の身柄を取り押さえ、あらかじめ呼んでいたであろう兵たちに賊を縛らせ連行させていた。

そのまま策殿は其奴と話をしていた。儂も話を聞こうかと思い、屋根から降りて策殿のもとに向かった。

さて、あれだけの實力を持ったものがいたというのは嬉しい誤算じゃった。我ら呉に使えてくれれば良いのじゃがな……。

兄上がお眠りになったあと、私は村の皆と宴の準備をしていました。凡その準備が整ったかと思うと、長老が会稽に買い出しに行った人達の様子を見てきてくれと言われたので、兄上を除けば一番足の早い私が向かうことになりました。

会稽に着いて村の人達と会いましたが買い出しが終わるまで、少し時間がかかるようでしたので私は街を廻ってみることにしました。

流石に街ともなると、村なんかとは様子が違っていろいろな店があり、ついつい色々なものを見てしまいました。

お猫様もたくさんいらっやって、モフモフさせていただいてしまいました。

酒家の近くを通過って、少しばかり広い所に出ると人ばかりができていました。

近くの木にのぼり、上から様子を伺っていると賊のような男が騒ぎ喚いていました。

なにやら人質をとっていたようなので、木から飛び降りて気配を消しながら背後をとって賊の首筋に手刀を叩き込みました。

賊が倒れると人混みの先頭にいた桃色の髪の女性が賊を抑えこみ、近くにいた兵隊に縛らせて連行させていました。服装からすると、荊州の官軍のようですが、一体何をしにきたのでしょうか。

少し気になったので、賊を連行している様子を眺めていると桃色の

髪の女性が私に話しかけてきました。

「賊の捕縛に協力してくれてありがとうね。私は孫策、字は伯符。建業の太守、孫堅の娘で賊の討伐に来てただけど・・・」

建業太守、孫堅。最近、建業に赴任してきたという新しい太守様。噂には聞いていたけれど、その人の娘が会稽に來ているとは思いませんでした。兄上に話したらなんと言われるでしょうか。

「私は周泰、字を幼平といいます。孫策様のお役に立てましたようによかったです」

「そんな硬っ苦しい話し方なくていいわよ。今の私はただの武将なんだし」

軽い調子で返してくる孫策様。だけど、その一言一言にはなにかこう、重みのようなものがありました。これが、王の一族が出す気配というものなのでしょうか。

「策殿、探しましたぞ」

そう言って手を上げながら誰かがやって來ました。銀色の髪をした妙齡の女性、ですがその雰囲気は名のある武人が醸しだすものでした。



「何言ってるのよ祭。屋根の上から賊を狙ってたじゃないの」

「お、バレておったか。儂もまだまだじゃのう」

そういつて豪快に笑うと、今度はこちらを向きました。

「儂の名は黄蓋、字は公覆。策殿の副官じゃ。よろしく頼む」

「はい。よろしく願います」

そう言つて私は頭を下げる。前の二人は少しばかり話をする私に向かつてこう言われました。

「ところでお主、もしかして【剣鬼の周承・隠密の周泰】の片割れかの？」

私が肯定すると、二人はすぐさま村に案内して欲しいと申されたので、街に来ていた村の人の買い出しも終わっていたようなので一緒に村まで行きました。

・・・討伐に連れてきた兵隊さん達、街においてきてしまつてよかったんでしょうか。

#### 4話（後書き）

11/9/16：細かい設定を修正

## 5 話（前書き）

今回はずいぶんごちゃごちゃしてます。実力不足です。一日一更新  
四日めです。

## 5話

外がなにやら騒がしいので仕方なく寝台から起き上がった。空に輝いていたはずの太陽は既になくなり、代わりに美しく輝く満月が登っていた。

いつの間に、などと思っていながらも周承は衣服を整えて直ぐ側に置いていた魂切を背負い家から出た。

村の広場まで歩いて行くとそこにはたくさんも料理や酒、大勢の人が居た。村の皆に帰ってきたことを告げると直ぐさま人だかりの中央に連れていかれ、周承は皆から料理や酒を進められた。

座って料理を食べ、酒を呑みながら周囲を見ると周泰の姿が無いことに気がついた。

「そう言えば、明命はどうしたんだ。どこにも居ないみたいだが」

「明命ちゃんなら、あっちの方でお客さんの相手をしてるよ」

客が来ているのか、と最初は思ったが、こんな辺境のそれも太守が治めていないような村なんかには誰か来るものだろうか。誰が来ているのか少し気になったのか、周承は示された方へと向かっていった。そこに居たのは桃色の髪的女性と、銀色の髪の妙齡的女性。女の二人旅は危ないだろうと思ったが、二人を間近で見て周承は気がついた。

なるほど、只者では無いということか。

周承は周泰に声をかけにいった。相手がどのような人物なのか分からない彼は、常に警戒を怠ることなく向かっていく。

「明命、ここにいたのか。探したぞ」

「兄上、起きていらしたのですか」

周承の声に反応して直ぐに後ろを振り向く周泰。そしてその様子につられて二人の女性も周承の方を向く。

「兄上、こちらは新しい建業の太守、孫堅様のところの武将の方々です」

周泰がそう言つと、桃色の髪的女性が口を開く。

「はじめまして、私は孫策、字は伯符。孫堅の娘よ。そしてこっちが」

「黄蓋、字は公覆じゃ。よろしく頼む」

孫策の言葉を遮るように自己紹介を始める黄蓋。二人の名を聞いて少しばかり驚くがすぐに返答する。

「私は周承、字は伯嗣と申します。そこにいる周泰の兄でございます」

「堅苦しい話し方はなくていいわ。そのほうが気楽だしね」

孫策の言葉に少々呆気にとられながらも、口調を変えて話すことにする。

「では、孫策殿と。改めて、この村に何か用事があるのですか？」

「用事というほどでは無いけど、少し会ってみたい人がいてね。たまたま会稽であつた周泰に案内してもらつたの。そしたらちようど宴だつて言つし私たちも参加しようかなつて」

軽い、軽すぎる。これが本当に太守の娘だというのか。周承は狼狽を隠しきれずすぐさま小声で黄蓋に尋ねる。

「黄蓋殿。孫策殿のこの様子は何時ものことなのですか？」

「うむ。策殿は何時もこのような調子じゃ。本人も堅苦しいことは嫌いのようじゃしな」

頭痛を隠し切れないのか、周承は頭を抱えながらうつろっていた。

多少なりとも様々な場所を旅してきた彼からすれば、そこまで上の立場では無いと言ってもここまで寛容な武将は始めてみた。しかも太守の娘がこれなのだ、太守が厳格な人間だとはとても思えない。

頭を抱えてうずくまる周承の様子を見ながら、孫策は首をかしげていた。

「どうしたの、周承。頭なんか抱えちゃって」

「いえ、現実から目を逸らしているだけです。お気になさらず」

孫策の疑問は更に深まっていった。一体何が問題なのかがわかっていないのだ。

通常、武官というのは特に上下がはつきりしていない場合はそこまで気にしない。だが、民と武官という立場になればそこには多少なりとも上下があるため、本来ならば話し方一つとってもきちんとしていないと不味いのである。

だが、孫策の様子はどうか。堅苦しいのが苦手だからと言って民の自分にさえ普通の口調で話しかけてくる。民のことを考えていると言えば聞こえはいいが、別な捉え方をすると軍規をなアナにしていても言える。

だが、そんな孫策の態度が周承は嫌いではなかった。旅をしている時には路銀を稼ぐために働かねばならない時があった。その時は近くの街にしばらくとどまり街で働くわけだが、太守が愚図な場所

はそこで働く武官や文官も愚図ばかりで、自分が武官であるからと言って金を払わない奴や、見目麗しい女性がいれば手籠めにしようとする外道も居た。

武官が上下をきちんとかきまえて居ることは大事だが民に対して威張り散らす愚図は生きる価値も無い、と周承は考えている。だからこそ彼は決して上下関係をなあなあにしない。だからこそ、今も最低限の礼儀を持ってこの二人に対応しているのである。堅苦しいと取られようとも、彼はこれ以上は譲歩できなかった。

「私の現実逃避はいいとしまして、会いたい人というのは一体誰ですか？」

「あら、その人なら今日の前に居るわよ。街で聞いた時は剣鬼と呼ばれていたかしら」

その瞬間、周承は理解した。この人は俺を登用しにきたのだ、と。

「登用しにきたのでしたらお断りですよ。未だ、この身を捧げるに値する君主に会えたことが無いので」

「あら、登用しにきたわけじゃないわ。私は話がしたかっただけだもの」

そうは言うものの、孫策の目は明らかに相手を見定める目だった。言い換えれば、獲物を品定めするような目とも言えるだろうか。



「登用が目的でないなら、人材探索といったところですか？」

「実際は賊の討伐のついでみたいなものなんだけどね。でもこっちに着いて話を聞いてみたら、もう討伐されたっていうじゃない。だったら、討伐したその人はどんな人なのかと思って」

「ですが、なぜ賊を討伐したのが私だとお分かりになったのですか。少なくとも私は何処にも行っていませんし、村の皆も今日は宴だと言って何処にも出ていないと思います」

そう言っていると、周泰がうつむきながら口を開いた。

「あの、兄上。賊の話でしたら、おそらく村から買い出しに行った人達が話したのでは無いかと」

買い出しに出ていた奴らが居たとは、なんというかものすごい偶然だな。そう思いながらも周承は納得したような表情になった。

「まあ、そういう事ならいいのですが。とりあえず、私は今のところ仕官するつもりは有りません」

そういうと孫策と黄蓋は意外そうな顔をした。

「お主は何処かに仕官したかったのではなかったのか？周泰が言うには仕官先を探して旅に出たと聞いておるが」

「確かに、私も始めは仕官先を探しに旅に出ました。しかしその旅路で幾度となく賊に襲われて滅んでしまった村を見てきました。自惚れかも知れませんが私はこの村を賊から守ってきたつもりです。ですが、今私がここを離れ何処かに仕官しようものなら、太守も居ないこの会稽付近の村々はおそらく滅ぼされてしまうでしょう。たとえ、隠密に長けている妹が居たとしても武力自体は私より遙かに下なのです。この村を守りきれるかどうか心配でなりません、何よりもたった一人の肉親が知らぬところで死んでしまう可能性すらもあるのです。今の私はここを離れることが出来ません。もしこの会稽を善政をもって治めることができるような人物が現れば、私はその人のために全てを捧げるつもりです」

「村を守る事云々はしかたないとして、妹さんに関しては実力があるのだから一緒に仕官すればいいじゃない」

孫策が尋ねる。だが、周承は直ぐに返す。

「妹にはもつと外のことを学んで欲しいのです。それこそ、素晴らしい隠密になることができる実力があるのですから。ですが、今のままでは私と妹、そのどちらもが村を出てしまえば村は滅んでしまう可能性がある。かといって私が残ると妹は一人で旅に出なければなりません。今の妹ではまだ賊が跋扈する中を一人で旅をするには力不足なのです」

周承の話聞き、黄蓋は頷いた。彼女なりにも思うところはあるのだらうが、周承の言い分に納得できたようだった。

孫策も納得したのか、晴れ晴れとした表情で言った。

「だったら、私たちは明日には戻らないといけないわね。で、母様に進言しなくちゃ。会稽を治めましょう、ってね」

孫策の言葉に再び呆気にとられたが、今度は周承も笑いながら孫策に答える。

「会稽を治めに来られるその時を楽しみにしております。孫策殿」

黄蓋もその様子から豪快に笑い声を上げ、周泰もまた手を合わせて笑顔を作っていた。その後、四人は大いに宴を楽しみ、夜は更けていった。

周承と話してみても私は思った。彼はとても優しい人間だと。

人は誰しもが利を求める。それは、金であったり名声であったりと

様々だが、彼の求める利は違った。

自分が最も大切に思うものを守ること。それこそが彼の利なのだ。だからこそ、彼に金だの権力だのを与えても仕方が無いのだということがわかった。むしろそんなことをすれば彼から疑わしい目で見られることだろう。それこそ、金や権力で人を飼う事ができると思っ  
っているような愚か者であると。

ならば、彼を手に入れるのに一番手っ取り早い方法は彼の守りたいものを私たちで守れる状態にしてやればいい。そうすることで、彼は安心して仕官することができ、何より絶対に裏切ることなど無い忠臣となってくれることだろう。彼の為人は話してみれば直ぐにわかった。

真っ直ぐな瞳には嘘偽りなどなく、彼の覚悟を語るときに表情は真剣そのものだった。そんなあれだからこそ、私の勘も大丈夫だと告げているのだ。

彼が私たちの仲間になることで私たちはまた一歩強くなれる。彼が仕官すれば、おそらくは妹さんも仕官してくれるだろう。そうすれば将が二人増えることになる。武の方は二人共申し分ないだろう。文の方は流石にわからないが、そこは冥琳に任せることにしよう。

私たちはまだまだ先に進まなくてはいけない。それこそ、民が安心して暮らせるようなそんな国を作らなくてはならない。母様はまだ建業の太守でしか無いが、いずれは他の州に進出して領土を広げなくてはならない。そのためには、揚州の基盤を磐石なものにしておなくてはいけない。でなければ、今の乱れ始めた漢王朝が崩壊した時に必ず困ることになるはず。

自慢じゃないけど、私の勘はそうそう外れたりはない。その勘が  
言っているのだから、おそらくは間違いないはず。

さあ、建業に戻ったら早速母様に進言しなくちゃ！

## 5 話（後書き）

質問がありましたのでこちらにも回答を書いておきます。

一刀君はたぶん出ます。そしてオリジナルのキャラも他にも出す予定です。

時代背景は一応黄巾賊がまだ表立って動いていない頃を想定しています。

11/9/16：細かい設定を修正 周承の字を伯嗣とする

## 6話（前書き）

今回は戦闘描写が多めです。ですが、作者の力量不足により上手いこと表現できていないかも知れませんがご勘弁を。一日一更新五日目です。

## 6話

太陽が登り始める頃、周承は家から出て魂切を振っていた。日々の努力こそが己の力になるとは、周承の弁である。

魂切を振るその様は、何かを見据えて居る。見据えた先に思い出すのは陳留の立ち寄った際に立ち会った、夏侯惇という名の豪傑。

陳留の太守、曹操が全幅の信頼を置かれる彼女は、身の丈はあるだろう大剣、七星餓狼を自在に操り見事な剣戟を繰り出してきた。周承も応戦し互いに実力を出し切った戦いは、曹操の判定のもと引き分けということ幕をおろした。

だが夏侯惇は周承と引き分けたのが悔しかったのか、次は勝つ、と言って今度は彼を倒すために現在、もう特訓中であるという。そんな話を夏侯惇の妹、夏侯淵から聞いた周承は、自分も負けられない、と思い今日も魂切を振るう。

虚実を織り交ぜ相手を幻惑し、相手の攻撃の先を読む。周承の戦い方は常に相手を無力化することを第一として、虚実を使いこなし相手の距離感や感覚を欺き、相手の動きが単調になるに連れてその動きに合わせて攻撃をする。

当然、それは一対一の場合を想定した動きではあるが、決して周りを警戒していないわけでは無い。もし、今の周承に敵意を出しながら攻撃を繰り出せば、実力のないものは首を刎ねられてしまうだろう。

周承の鍛錬の様子を家の中から伺っている者がいた。昨晚、宴の際



一緒に飲み明かした孫策とその側近、黄蓋である。妹の周泰は既に家には居らず、彼女もまた何処かに鍛錬に行ったようであった。

「やれやれ、朝早くから何やら物音がすると思えば、周承の鍛錬であつたか」

「そうみたいね。でも、あの太刀筋。かなり出来るみたいね」

「そうでなくては、剣鬼などと呼ばれることは無いじゃろつて」

二人が周承の鍛錬の様子から、実力を測ろうとする。一流の武人であるならば多少の太刀筋を見るだけで、相手の実力などがわかるからだ。彼女たちから見て周承はお眼鏡に叶うだけの実力があるようだ。

二人がコソコソと話していると周承が魂切を振るう手を止めて、家の方を向いて言った。

「お二方、そのような所で何をされておるのですか？」

周承は彼女たちが鍛錬を覗き見ている事がわかっていたようである。

周承に見破られた二人は家から出て、彼の前まで出てきた。

「いやなに、朝早くから何やら物音が下でな。気になって様子を見

ていたというわけじゃよ」

「そういうこと。周承の実力が見れてちょうど良かったわ」

周承は魂切を背中の鞘に収めると、二人の方を向く。

「見ていても余り面白いものでは無いでしょう。男の武の鍛錬などというものは」

「そうでもないわよ？人によって様々な武の形があるから、貴方の武を見るのはなかなか楽しかったわよ」

「そうじゃな。しかし、お主は誰かを見据えて鍛錬しておったようじゃが、一体誰じゃ？」

さすがは黄蓋殿といったところか。そこまで見抜かれると思っていなかった周承は驚きながら黄蓋に答える。

「旅先で会った陳留の武将です。少しばかり縁が有りまして手合わせしたのです。なかなか強い方でして、引き分けになってしまい、今は彼女に勝つために鍛錬の材料にしています」

「なるほどの。して、その武将というのは誰じゃ？」

「夏侯元讓。曹操殿の配下の方です」

周承の言葉に黄蓋はなにか思い当たる節があつたのか、すこしばかり悩むと直ぐに頭を上げて言った。

「夏侯惇か！ 儂も一度会つたことがある。あれは賊の討伐の為の遠征で堅殿についていつた時じゃつたかの」

「黄蓋殿もご存知でしたか」

共通の知人の話で盛り上がる周承と黄蓋の様子をみて、孫策は話に入れないでいた。自分の知らない人物の話をされれば当たり前である。

「あのさ、私が知らない人の話で盛り上がりながらもおもしろくないんだけど」

「む、それは済まなかつたの。では、儂は周泰の方を見てくることにしよう。周承、周泰は何処に行つたのじゃ？」

「妹ならおそらくは山の中かと。あそこは隠密の鍛錬に調度良いので」

そう言つて周承は家の裏手にある山を指し示す。

「そうか、では儂は行ってくる。策殿、周承と話でもして機嫌を直

して下されよ。では、またあとの」

そう言うと、黄蓋は家の裏手にある山へ向かって行く。残された二人は黄蓋を見送った後に向かい合う。

「さて、孫策殿。先程から抜きたくてたまらないのでしょうか。腰に下げているそれを」

「わかる？ 貴方の鍛錬を見ていて体が疼いちゃって仕方ないのよね。少し、相手をしてもらえるかしら？」

孫策の口元が釣り上がる。それと同時に目の色が変わる。普段の人当たりのいい者の目から、狩る者の目へと変わった彼女は腰にさげた剣を抜き周承に相対する。

周承も孫策の意思を汲み、先ほど収めた魂切を抜き放つ。同時に周承の目も狩るものへと変わる。

「周伯嗣、全身全霊をもって御相手致す」

少しずつ近づく両者。先に動いたのは孫策だった。

まずは首を狩るための横薙ぎの一閃。周承はそれをギリギリまで引きつけて体を引いて避ける。それと同時に魂切を孫策の脚めがけて振り抜く。それを読んでいた孫策も軽く跳躍して躲す。

そのまま一度距離をおいた孫策は一気に加速を付けて周承に向かっていく。加速をつけたまま再び周承の首を狙う。狙いがわかっていいのか、周承は魂切を孫策の剣に合わせて縦に構え受け止める。互いに鎧迫り合いのような状況になり、お互いに後ろに飛び退く。

「さすがは剣鬼といったところかしら。私の剣を受けてもなんとも無いみたいだし。これなら私も本気を出せそうね」

「江東の虎の娘の本気、しかと見せて頂きましょう」

三度目の孫策の首を狙った攻撃。だがそれは今までのそれとは速さが圧倒的に違っていた。無情に、そして鋭く周承の首を狙ったその一撃は彼の首を取るかと思われたが、彼もまた剣鬼と呼ばれるほどの手練。そうやすやすとは攻撃を通さない。今度は魂切を振るって孫策の剣を打ち払いに行く。

剣戟の音が鳴り響くと、そのまま何合も二人は打ち合った。互いに相手の剣を打ち払い、時には躲し、虚実を混ぜて隙をつくろうとする。だが、実力は拮抗しているのか、なかなか決着はつかなかった。

何合打ち合っただろうか。両者とも後何合とも打ち合うことはできないほどに疲弊していた。

距離を取りなおした二人は息を整えると、再び身構えた。

「これで、最後にしましょうか」

「そうですね。ですが、勝ちを譲る気は有りませんので」

「言うわね、けどそれだけの實力はたしかにあったわ」

再び無言になる二人。両者ともお互いの間合いを見極め、隙を探り合った。

風が吹いた。その風が地に落ちていた木の葉を巻き上げて止む。風が止めば木の葉はただ舞い落ちるのみ。木の葉が舞い落ちたと同時に、今度は周承が動いた。

孫策の腹を目掛けて魂切を突く。孫策はそれを体を捻って躲し、そのまま遠心力を利用して周承の首を狙う。突いていた魂切を上には振り上げ孫策の剣を受け止めそのまま体勢を立て直し両手で獲物を握り直して孫策の一撃に耐える。孫策は周承が両手で剣を握ったのを見るやいなや、体重をかけて彼を押すも、流石に片手でさらに不安定な体勢では力が出し切れず、そのまま周承に押し返される。

弾かれた孫策は体力が尽きてしまったのかそのまま尻餅を着いてしまいそこに周承が魂切を首元に当てた。

「ここまで、ですね」

「・・・そうみたいね。やれやれ、もう少しだったんだけどなあ」

周承は魂切を収め、未だ尻餅を着いて立っていない孫策に手を差し出す。孫策は周承の手を握るとそのまま引っ張ってもらいながら立

ち上がった。

周承は孫策に労いの言葉をかけるべく口を開く。

「流石は孫策殿です。私の虚実にあそこまでついてこれたのは夏侯惇の武人の勘ぐらいのものです」

「あら、私のも勘よ。なんかこう、危ないっていうのがわかるのよね」

周承は愕然とした。夏侯惇もなかなかの勘を持っていたが、まさかそれと同等ほどの勘を孫策殿が持っていたようとは。

・・・これは、孫策殿も視野に入れた鍛錬をするべきだろうか。そんなことを思いながらも周承は家に入ろうとする。だが、何かに気づいたのか再び口を開いた。

「明命、居るのならちゃんと出てこい。こういう時には覗き見をするなど言っているだろうに」

「やはり気づかれていましたか、兄上」

そう言うと周泰が茂みの家の近くの茂みの中からでてきた。

「・・・周承、貴方よくそこに周泰が居るって気づいたわね？私は何も感じなかったのに」

「これも鍛錬の賜物です。日頃から妹の隠密の訓練に付き合っていましたので気配を察知する能力が鍛えられたのです」

周泰の隠密としての能力は非常に高い。それこそ孫策が気づくことができないほどのものだ。周承の気配察知の能力は推して知るべしである。

「まあ、兄妹そろって優秀って事がわかってよかったわ。これなら母様に進言するときには有利になりそうね」

「そうじゃな。これほどの手練じゃ、堅殿も喜んで迎えられるじやろって」

声の主である黄蓋が周泰の側にいた。当然ながら周承は気づいていたが、孫策は気づいていなかったようである。いつの間にかそこにいた黄蓋に彼女は驚いていた。

「いつの間に来たのよ、祭。吃驚したじゃないの」

「この程度のことでは話しになりませんが、策殿。現に周承は気づいていたようじゃな」

「いえ、黄蓋殿の気配がしましたのでおそらく一緒に居るのだろう



「思っております」

周承は周泰から手ぬぐいを受け取ると汗を拭き始めた。孫策も同じように手ぬぐいを受け取り汗を拭く。

「さて策殿。周承の実力も確認できたわけじゃし、そろそろ長沙に戻るとするかの」

「そうね。いつまでもここに居るわけにはいかないし」

そう言うとき孫策は周泰に手ぬぐいを返し、周承に向き直って言った。

「それじゃあ、世話になったわね。今度は会稽を治めに来たときに会いましょう」

「ええ、お待ちしております」

孫策は周承の答えに満足したのか笑みを浮かべた。

「真名を預けてもいいんだけど、やっぱりそれはまた会ったときにしましょう。それじゃあ二人共、元気でね」

そう言って孫策と黄蓋は村をでて、建業へと戻っていった。

会稽の街に置き去りにされた孫家の兵士達が孫策達を探しまわって  
いたのは別の話である。

## 6 話（後書き）

11/9/16：細かい設定を修正

## 7 話（前書き）

今回は時間がなくてかなり大急ぎで書いたため少々変な所があります。そんな事も気にされないという方だけお読み下さい。一日一更新六日目です。

## 7話

徐州の西に位置する都市、下ヒ。そこにある酒家に三人の女性が座って話をしていた。

「どうやら、州境にいる賊の噂は偽りでは無いようですねー」

少し癖のある金色の髪少女が手にした飴を舐めながら言う。

「そのようですね。場所にしても賊が狙いやすい場所に間違いありませんから」

隣に座っていた眼鏡をかけた少女も、彼女の意見に同意する。

「では、その賊を倒して路銀を稼ぐとするか」

二人と対面に位置した場所に座っていた紅い槍を携えた女性が席を立ちながら言う。

「星ちゃん。少し待って下さい。今直ぐに行くというのは余りおすすめ出来ません」

飴を持った少女が立ち上がった女性を引き止める。

「なぜだ、風。善は急げというではないか」

「もうすぐ日が暮れます。暗くなってから夜襲を仕掛けたほうが  
確実ですし危険が減りますから」

今度は眼鏡を掛けた少女が星と呼ばれた女性を引き止める。少女の  
言葉に思うところがあつたのか、彼女は再び座りなおし二人のほう  
を向く。

「確かに、夜襲のほうが何かと確実だな。日が暮れるまで待つとし  
よう」

そう言つと彼女は再び酒を飲み始めた。

「いくら日が暮れるまで少し時間があると言っても、お酒はまずい  
のではないですか？」

「そんなことはないぞ、風。それにこの程度は呑んだうちにはいら  
ぬというものだ」

そう言つて再び酒を飲みだす。何時ものことなのか眼鏡を掛けた少

女も彼女を嗜めるのをやめた。

揚州北部、ちょうど徐州と州境となっている場所。そこに賊が出るという噂があった。州境であるため多数の商隊が建業や会稽に向かうためにはここを通る。そこを賊が狙っているのだという。

確認されている賊の数は凡そ百。さして多いわけでは無いが、商隊から略奪を行うには十分すぎる数である。

日が暮れてあたりが暗くなると彼らの根城にしている洞穴では宴会が開かれていた。どうやら今日も何処かの商隊を襲ったようだ。

人を殺すことで得た酒を呑み、食い物を食べ散らかし、何処からかさらってきた女性を犯すその様は、もはや人間のものではない。人を止め、畜生に堕ちた哀れな獣共の姿だった。

先ほどの三人組のうちの一人、星と呼ばれていた彼女は洞穴の近くまでやってきていた。

「やれやれ、所詮は賊だな。ここまで簡単に近づけては拍子抜けというものだ」

彼女は自前の槍を構えながら洞穴に近づき中に入った。洞穴の中で賊共の様子を見た彼女は怒りを覚えた。

抵抗できぬものから物を奪い、人としての尊厳をも踏みにじるその姿に、怒りを抑えられなくなった彼女は潜んでいた物陰から出て賊共に向かって叫ぶ。

「聞け！人としての尊厳を失い畜生に堕ちた外道共！貴様等はこの趙子龍の逆鱗に触れた！全員まとめて成敗してくれようぞ！！」

彼女はそのまま走りだし賊の数人を瞬く間に刺し殺す。酒に酔っていた賊共は遅れながらも剣を抜き、彼女に向かって襲いかかった。

心の臓や頭を突き刺して一人二人と賊を殺し、瞬く間にその数を半数ほどにまで減らしたが、流石に賊共も馬鹿ではないらしく頭らしき男の指示で、彼女の周囲を取り囲んでいた。

勝利を確信したのか、賊の頭らしき男が前に出てきて彼女に向かって口を開いた。

「さて、威勢のいいお嬢ちゃんよ。このまま殺されるか、俺たちに犯されてから殺されるか、どっちか好きな方を決めな！」

賊の下卑た言葉に彼女は毅然と言い返す。



「貴様等のような下衆にこの身を犯される位なら、死んだほうがましというもの。そもそも、貴様等が私を殺すことなどできようはずもない」

賊共はニヤニヤと下卑た笑みを浮かべる。人数と相手を取り囲んだという状況が彼らに余裕を与えているのだろう。

彼女自身も怒りで賊を半数斬るために体力を消費しすぎたようで、残りの半数に取り囲まれた今の状況に危機感を感じていた。だが、弱気になったところを見せれば賊共は更に調子に乗るであろうことは想像に容易い。彼女は決して己の弱さを相手に見せることはなかった。

「そうかい、なら動けないほどにいたぶってから犯すことにしようか……。野郎ども、かかれ！」

「……おう！」「……」

取り囲んでいた賊が再び彼女に襲いかかる。彼女は槍を構え応戦するものの、多勢に無勢。遂には槍を弾かれてしまった。さらにその衝撃で彼女は尻餅を着いてしまった。最大の隙ができた為に賊の一人が彼女に殴りかかるようにする。

ここまでか、そう思っただけで彼女が目を開くも彼女が痛みを感じることはなかった。目を開けて周りを見ると、そこには黒い服を着た普通よりも長い剣を振る男の姿があった。

「賊、か。これでは人というよりも獣の集まりだな」

「そうですね。人としての尊厳を感じません」

賊の居るという洞穴にやってきた周承が最初に思ったことがそれだった。村にやってきた会稽の商人が言ったことによれば、州境で暴れまわっている賊が会稽の経済を邪魔しているというのだ。州境であるから商隊を襲って略奪をしているのだろう。

しかも聞く所によれば商隊についていった女性を攫っているという。ここまで来ると人としての尊厳はもはや無いのだろう。

「兄上、早く捕まっている人達を助けなくては」

妹の言葉に頷き返し、俺は背負っている魂切を抜き放つ。

「明命、お前は他に捕まっている人が居ないか確認してこい。俺はあの女性を援護する」

「了解です、兄上！」

そう言つと明命は直ぐに姿を消した。本当に隠密に長けたやつだ。

俺も急ぐとしよう。あの女性も危ないようだしな。

俺は女性の前に飛び出して彼女に拳を降ろそうとしていた男の腕を切り裂いた。汚らしい叫び声と共に鮮血があたりに舞う。

「ご無事ですかな」

俺は尻餅を着いている女性を起こし、落ちていた槍を拾い彼女に渡す。

彼女は頬を赤く染めながらやりを受け取り俺に向かって居住まいを正した。

「助かりましたぞ」

「お気になさらず。今は奴らのことを考えて下さい」

「そうですな、話はまた後ほど」

そう言つて俺たちは背中合わせになる。囲まれている時は互いに背を合わせ、敵に背を向けないことが鉄則である。

「さあ、賊共よ。先程は不覚をとったが今度はそうはいかぬぞ！」

そう言つて女性は賊に向かつて突撃していく。俺も彼女の反対側に立つ賊に向かつて走る。

さあ、お前たちにも安らかな眠りを与えてやろう。

そこからはもはや戦いと言つにはおこがましい蹂躪であつた。

周承が剣を振るえば賊の首がいくつも飛び、趙子龍と名乗つた彼女もまた槍を振るえば賊が血を吐いて倒れる。初めて会つた二人とは思えぬほどの息のあつた連携に賊は凄まじい勢いで鮮血を吹き上げる置物へと変化した。

「ば……化物め！」

賊の誰かがそんな叫びを上げた。だがそんな言葉を気にする様子もなく、周承は賊を切り続け、彼女もまた賊を突き殺し続ける。

粗方の賊を殺し終わるとそこに残っていたのは頭と呼ばれていた男だつた。

「・・・化物共が！」

男もまた彼らを化物だと罵る。だが、そんな言葉を周承は一蹴した。

「貴様のほうが、余程化物だろう」

そう言つて、周承は男の首を刎ねた。首から上を失つたその肉体は地の噴水に成り代わり、あたりに鮮血をまき散らした。

「容赦がないのですな」

「化物に容赦など必要ないでしょう」

周承は剣に付いた血を拭うと背負った鞘に収めた。彼女もまた槍を振るい血を払うと発していた殺気を霧散させた。

「さて、ご助力感謝致しますぞ。我が名は趙雲、字を子龍と申す」

「私は周承、字は伯嗣と申します」

「そのような堅苦しい話し方をされなくても良いですぞ。私は気にさせぬ故」

「そうか。では趙雲、よろしく頼む」

周承はそう言う周囲を見渡す。賊の死体とは別に先ほどまで襲われていた女性たちが居た。周承は女性たちのもとに行き、声をかける。

「皆さん、私は会稽の街から来ました。直ぐにここをでて一番近い建業に向かいます。ついてきて下さい」

そう言う周承は女性たちを先導し始めた。趙雲は周承の様子を見て彼を手伝い始めた。

広場にいた人以外にも捕まっているかも知れない人達を探すべく周泰は洞穴の奥へと向かっていった。

道中、広場に向かおうとしていた賊を懷に忍ばせていた小刀で首を斬って殺しておく。広場に増援を送らせない為でもあるが一番は捕まっている人の救助に邪魔になるからである。

ある程度奥に行くともた少し開けた空間があった。どうやら攫って来た人を閉じ込めているらしい。入り口に木製の檻を作り、人が外に出ないようにしていた。檻であるから、当然何人かの賊が見張りをしていたが、その見張りの仕方は雑で、すぐさま背後を取りさっきの賊と同じように首を斬る。

見張りの賊を全員仕留め、檻に掛かっている鍵を探す。少し大柄な賊が懷に仕舞っていたようで、探すのに少々手こずったが直ぐに見つけることができた。

周泰は檻の中にいる人達に向かって話しかける。

「皆さん、私は会稽の街から皆さんを助けに来ました。広場の方では私の兄が賊を斬っています。兄が賊を斬り終え次第ここから脱出を開始します。直ぐに出発できるように準備していて下さい」

そう言つて、周泰は檻を開けてなかに入られていた人達を外に出す。全員が出たのを確認して周泰は再び広場へと向かった。

広場についた頃には周承と趙雲が賊に襲われていた人達を外に連れていこうとしていた。周泰は周承のもとへ向かい檻に閉じ込められていた人達が居たことを報告しそのまま二人で檻の方へ向かった。その際に趙雲に女性たちの移動を任せた。

檻の前まで戻った二人は捕まっていた人達と共に洞穴を抜けた。抜けた先には既に趙雲たちが出てきており、そこには周承達が見知らぬ顔の少女達が居た。

## 7 話（後書き）

下ヒの表記なのですが、ヒの字が機種依存文字なのでカタカナにしております。

11/9/16：細かい設定を修正



## 8話（前書き）

少し遅れました。一日一更新七日目です。何時の間にやら10000  
0ユーニークを突破しておりました。皆様、ありがとうございます。

## 8話

二人の少女は周承達の姿を確認すると彼らのもとへと歩いてきた。

眼鏡を掛けた少女が周承に対して頭を下げる。

「私たちの友人を救っていただきありがとうございました」

「気にしないで下さい。襲われている人がいればそれを救うのは人として当たり前のことです」

そう言っで眼鏡の少女から離れて趙雲のもとに向かう。趙雲もこちらに気がついたらしく助けた人々の集まりからこちらに向かってくる。

「改めて、助かりましたぞ。貴殿のおかげで無事に二人とも再開出来た故」

「あの二人は趙雲の知り合いだったのか。だが、武術ができるようには見えにないが・・・」

「風たちの武器はココですからねー」

そう言っで自分の頭を指す飴を持った少女。周承はその動作で気がついたらしく納得した表情になった。

「それは失礼をしました。お二人は文官志望でしたか」

「わざわざ丁寧な口調で離さなくてもいいですよー。風たちも気にしませんから」

「では、自己紹介をしておこう。俺は周承、字は伯嗣。一緒にいたのは妹の周泰だ」

周承は二人に自分の名を告げ、助けた人達をまとめていた周泰の方を示して妹だと紹介する。

二人の少女は周承と周泰の名を聞いて少々驚くも、自分の名を告げる。

「風は程立といえます。よろしく頼みますよ、お兄さん」

飴を持っていた少女が自分の名を告げる。

「私は戯志才といえます。周承殿よろしく願います」

眼鏡を掛けた少女もまた、自分の名を告げた。

二人の紹介も終わった頃に周泰が四人のもとにやってきた。どうや

ら助けた人達をまとめ終わったらしい。

「兄上、それに皆さん。助けた人達をとりあえず建業まで連れていきましよう」

「そうだな。急がないと他の賊が襲いに来ないとも限らないしな」

周承の言葉に四人がうなずき建業まで助けた人達を連れて進んていった。

少し進んだところで、程立が俺に話しかけてきた。

「ところでお兄さん。お兄さんはこのあたりで噂されている剣鬼ですか？」

やはり、気づかれるか。あれだけ街で噂されていれば名を明かせばわかるだろう。

「俺をそう呼ぶ人もいるな。むしろ噂のせいでそんなことになっているんだが」

「火のない所に煙は立たないですよー。お兄さんは相当な剣の使い手なのでしょう?」

なかなか鋭い。さすがは文官志望。目指す先はおそらく軍師と言ったところか。

「背負っているコイツを見ればわかると思うが、普通より長い剣だから目立っているだけさ」

「そうなのですか、星ちゃん?」

急に、程?が話を趙雲に振る。

「そんなことは無かったぞ。実際に共に戦ってみたが、見事な腕前ござった。私と試合って頂きたいほどにな」

そんなことを言いながら含み笑いをする趙雲。試合うのは構わないが、俺が強いということは否定しておかねば。

「俺はそこまで強くはないさ。今の自分もまだまだだと思っているからな」

そう言つて俺は否定する。自分はそこまで強くないと、自分に酔うことがないように自分の心に釘をさして。

「自分の強さを誇つて自分に酔わないことは大事ですが、余り謙遜するのは贅辞を送っている相手に対して失礼だということも知るべきですよ、周承殿」

そう言つて戯志才も話に参加する。確かに、村の皆からも俺は謙虚すぎるなどと言われていたが、それほどまでに謙虚なのだろうか。少しばかり複雑な心境になりながらも四人で話をする。明命は今は斥候の代わりとして街までの様子を見てきてもらっている。

「そろそろ、妹が戻ってくる。このまま行くにしても迂回するにしても急がないといけないな」

「そうですね、賊が居ないとしても疲れは溜まっているでしょうから早いところ街につかないと助けた方々が衰弱してしまいます」

戯志才の提案に全員の歩く速度が速まる。やはり皆早く街に着いて休みたいのだろう。

まもなくして明命が帰ってきた。結構な距離を走らせたはずなのに息一つ切れていないのは、やはり日ごろの鍛錬の賜物だろう。

明命は俺のところまで来ると報告を始めた。

「兄上、この先に賊のような輩はいませんでした。このまままっすぐ進めば問題なく街に着けそうです」

「そうか、ご苦労様」

そう言つて明命の頭を撫でてやる。目を細めて気持ちよさそうにしているその姿はまるで猫のようだ。しばらく撫でてから手を放すと少し残念そうにしていたので、家に帰ってからまた撫でてやることにしよう。

さて、明命が確認した所によれば、賊の姿は無かつたらしい。このあたりを縄張りにする賊は先ほどの奴らで最後だったのかも知れない。まあ虫のように湧いて出るので今は居ないというのが正しいのかも知れないが。

「賊が居なかつたのでしたら急いで街に向かうとしましょう。もうすぐ夜が明けてしまいますし」

戯志才の言葉に俺は東の方をしてみる。確かに太陽がもうすぐ顔を出しそうだった。洞穴から出た時はまだ暗かったというのに、時が経つのは早いということなのだろうか。

「皆、もう一頑張りだ。街までもうすぐだぞ！」

そう言つて俺達は助けた人達を励ましながら建業へと向かった。

建業に着いたのは日が登つて少ししてのことだった。早く街につきたい一心で全員の歩く速度が速くなったことで周承達は直ぐに建業に着くことが出来た。助けた人達は各々自分たちの本来あるべき場所へと歸つていった。その際に周承たちに礼を言うことは忘れずに。

「さて、これで助けた人達は皆元の生活に戻つていった。俺たちも歸るとしよう」

「お待ちください。是非、私と一度手合わせしていただきたい」

趙雲が周承を引き止めていた。理由は単純で彼と手合わせしたいからだそうだ。趙雲は生粋の武人であり、強者に出会つたのならはその実力を己の手で確かめなくては仕方が無いのだとは戯志才の弁。

周承も最初は渋つていたのだが、趙雲のあまりに熱心な姿勢に心が動いたのか周泰に勝てたら相手をするといった。

この言葉に最も驚いていたのは周泰本人であつた。いきなりの兄からの指令に驚きを隠せず、オロオロとしていた。そんな周泰の様子を見て趙雲が、大丈夫なのかといったのが切っ掛けとなり周承は、大丈夫だ、の一点張り。趙雲は仕方なく周泰を連れて広場へと向かった。



広場に着いた一行は軽く準備運動を始める。勿論、程立と戯志才はしていないが。

周承は緊張している周泰のもとに行っていた。

「明命、趙雲はかなりの手練だ。だが、決してお前がかなわないなんてことはない」

「兄上・・・」

そう言うと周承は背負っていた剣をおろし、周泰に手渡す。

「コイツを使え。流石に徒手空拳じゃ厳しいだろうからな」

「でも、これは兄上の・・・」

「構わないさ。もともと、お前に渡さなくてはいけないものだったしな」

「え？」

そう言うと周承はその場から離れる。

「さあ、今までの鍛錬の結果を見せてみる。十分に魂切を使いこな

せていたら、それはお前のものだ！」

「は……はいっ！」

元気よく返事をする周泰。渡された剣を背負い剣を一度抜いてみて振ってみる。

何時も鍛錬で使っていた模造刀よりも軽い。そして振るう度に剣が体に馴染んで、一体化したような錯覚に陥る。

これならいける、そう思い周泰は剣を振るうのを止め、相対する趙雲の方を見る。

趙雲も周泰に対する見識を改めたのかその瞳に蔑みや哀れみの色は無かった。代わりにあるのは戦いたいという闘志のみ。

「準備はよろしいかな、周泰殿」

「いつでもよろしいですよ、趙雲様」

そう言ってお互いに獲物を構える。あたりを静寂が支配し、二人の闘気がぶつかり合う。

「……ゆくぞ」

最初に動いたのは趙雲だった。凄まじいまでの加速を付けて周泰に近づく。周泰も趙雲の動きを観察している。

趙雲が最初に鋭い連続突きを放つものの、周泰はそれを躲し時には反らし、弾丸のような連続突きを全て捌く。趙雲の連撃が止まった瞬間、今度は周泰が攻撃を始める。最初は首を狙った鋭い斬撃。趙雲はそれを槍で防ぐも周泰の攻撃は止まらない。次に狙うのは趙雲の軸足。それも軽く跳躍して躲すと今度は頭を狙って突きを放つ。躲し切れないかと思われたその突きを趙雲は首を反らすことで何とか直撃は免れるも、頬に一筋の傷が付いた。

「やるな、周泰。流石と言っておこうか」

「趙雲様も見事です。あの連撃は流石に捌ききれませんでした」

そう言っていると周泰が背負っていた鞘の紐が切れ、更に髪留めも切れていた。

「実に面白い。これほどまでに強い相手は母上以来だ」

「私は兄上以外に手合わせしたことがありませんが、貴女がとても強いということはよくわかりました」

二人はもう一度武器を構え直し集中を始める。だが、そこに周承が割り込んだ。

「二人共そこまでだ。これ以上やりあつて無駄に傷を増やしても仕方あるまい。ましてや女の子が生傷を作るものじゃない」

そう言つと広場を漂つていた空氣が霧散する。やれやれつと言つた表情の周承は懷から藥入れを取り出して趙雲の前までいく。

「コイツは傷によく効く軟膏だ。俺がよく使っているものだから効き目は間違いない」

そう言つて趙雲の頬に付いた傷に軟膏を塗りこんでいく。軟膏を塗られている趙雲は少しばかりおとなしかった。

傷に軟膏を塗り終えた周承は今度は周泰のもとに向かう。

「ほら、明命も額に傷ができてるのだろつ。見せてみる」

そう言つて周泰の前髪を上げて額を顕にする。確かによく見てみるとそこには赤く擦れていた。

「たぶん槍を避けてる時に擦つたんだな。少し滲みるかも知れないが我慢しろよ」

額の傷に薬を塗ると周泰が少し涙目になった。おそらくは軟膏が滲みているのだろう。

軟膏を塗り終わると周承は二人の方を向いた。

「とりあえず、今回は引き分けということにしておいてくれ。妹と戦えといったのは俺だが、流石に女の子が傷付くのは夢見が悪い」

そう言っただけで彼はその場を後にした。残された二人は呆然と立ち尽くすも、そこにおいても仕方が無いと気づき、周承の後を追った。

## 8 話（後書き）

11/9/16：細かい設定を修正

## 9 話（前書き）

またしても予定の時間に遅れてしまいましたorz  
今回で星たちと分かれます。暫くの間は呉一本となるでしょう。

最近自分の文章に自信が余計に変なことになっている気がしますので、よろしければ感想をいただけると助かります。

一日一更新八日目です。

## 9 話

広場を離れた周承、周泰、趙雲の三人は宿を取りに行った程立と戯志才を探していた。

「一体、あの二人は何処に行ったのでしょうか」

「建業がいかに広いとはいっても、宿を探していけば見つかると思つたのだが・・・」

宿を取りに行ったのだから宿を探してまわれれば逢えるだろう、と三人は建業中の宿を歩き回っていた。

だが、いくら宿をあたってもそんな名前の人は来ていないと言われ続け、三人は困り果てていた。

「まったく。一体何をしているというのだ、あの二人は」

「少なくとも、程立はわからないが戯志才が付いていたのだ。変なことにはなっていないと思うのだが」

一刻ほど歩きまわって三人はようやく二人を見つけることができた。

二人は食堂で食事をしていた。たまたま近くの宿の店主に聞くとそこに入っていたというのでようやく見つけたとは思ったが、まさ



か食事をしているのだ。しかも、先程居た広場とは真反対の位置にあったため三人が見つけるのに一刻もかかってしまったわけだ。

「二人共、探しまわったのだぞ！」

耳を貫くような大声なのにも関わらず程立は気にした様子もなく趙雲に返す。

「いやー、ごめんなのですよ。流石にココとは真反対の広場で試合をしているとは思わなかったのですよー」

「とはいえ、面倒をおかけしたようで。申し訳ありません」

そんな二人の態度に毒気を抜かれたのか趙雲は落ち着きを取り戻し、彼女達の隣に座った。周承と周泰もそれに習って空いた椅子に座る。

「それで、宿はとれたのか？」

「ええ、ここから直ぐの場所に宿を二部屋取りましたよー」

程立の言葉に周承は二部屋で大丈夫なのだろうか、などと思っていたが程立が言うのだ、問題はないのだらうと周承は納得した。

趙雲がラーメンのメンマ大盛りを注文していたことに驚きながらも

周承と周泰も料理を頼む。やがて料理が届き、五人で談笑しながら食事をとっていた。

半刻ほど経って料理を食べ終えた俺たちは店を出て宿へと向かった。昼食の時に程立にい聞いていたとおり、部屋は二部屋とってあったがさすがに一部屋に四人は多かつたらしく、俺の部屋には妹の明命が来ていた。まあ、家族なんだから問題ないだろうという話なのだろう。そのとおりなんだがな。

明命と一緒に部屋に入る。普通よりも多少はいい部屋といった程度でそれなりに綺麗にされていたので、特に気に入らないといったことは無かった。明命も部屋にはいつてさして問題も無かったように直ぐに荷物を寝台の近くに置きに行っていた。

俺も荷物を置いて寝台に腰掛けてゆっくりしていると、明命が広場で渡した魂切を持って来た。

「どうした、明命。それはもうお前のものだぞ」

俺の言葉に焦り始める明命。

「えっ！でも兄上はこれを使いこなせていたらと・・・」

「そうだな。だからお前のものなんだ」

明命がオロオロしながらも俺の言葉に何かを察したらしい。

「それって・・・」

「お前は十分に魂切を使いこなせていたよ。今日からお前が魂切の主人だ」

そう言って明命の頭を撫でてやる。気持ちよさそうに目を細めている姿を見ると心が癒される。

しばらく撫でていたのだが、俺は言っておかなくてはならないことがあったので撫でる手を止めた。

「明命、俺はお前に魂切を渡したわけだがそれで高みを目指すことを止めるんじゃないぞ。目標を見失い、進むべき道を誤ってしまつては、魂切を渡した事が無意味になってしまう。そして何よりも、お前が駄目になってしまう」

そう言つと、明命はやる気の満ちた表情で俺を見つめ言った。

「はいっ！兄上に渡された魂切を扱うに恥ずかしくないような武人になるために、この周幼平、日々精進してゆきます！」

しっかりとした意思を力強い声で宣言する。

「それでこそ、俺の妹だ。これからその意気で精進していけ」

「はいっ！」

俺はもう一度明命の頭を撫でてやる。

こんな少女にさえも武という名の力を与え、戦いの世の中を強いる今の時代。それはとても悲しくもあり、だが一方で、ここまでしっかりとした意思を持って育ってくれた妹を嬉しく思う自分もいる。

こんな時代でなければ明命もまた女の子として生きて行くこともできただろう。

人を殺めなければ生きていけない今のような生活を強いることもなかっただろう。

両親の居ない悲しい幼少時代を過ごすこともなかっただろう。

だからこそ、俺は決心しなければいけないのかも知れない。村を守って過ごすだけの剣士として生きるのか、それとも誰かに仕え、国という広い範囲を守るような武将になるのかを。

「兄上？」

そんなことを考えていると明命が心配そうな顔で俺を見上げていた。心配させてしまったかも知れない、そう思った俺は心配ないよ、と告げ寝台から立ち上がる。

「今日は流石に疲れたな」

「そうですね。賊退治も大変でしたが、私はその後の趙雲様との手合わせが一番大変でした」

「趙雲は強かったからな、明命もいい経験になっただろう」

「はい。兄上ほどではありませんでしたが、見事な腕前でした！」

趙雲のことを褒め称える明命。確かに、彼女の槍捌きは見事なものだった。実際のところ、明命はああ言っているが、俺が趙雲とやりあったところでさして結果は変わらないだろう。明命が俺を強いと思うているのは明命の動きを全て把握しているからに過ぎないわけだからな。

「明命も見違えた。最近手合わせしていなかったがあそこまで強くなっているとはな。俺も鼻が高いというものだ」

兄という立場でつける色眼鏡を抜きにしても間違いなく明命は見違えた。昔のままであったなら、趙雲の連続突きを全て捌くことは出来なかっただろう。あいつなりに鍛錬をしつかりと積んでいたというわけだ。

「お前なら俺よりも強くなれるだろうよ・・・」

そう呟いた俺の声は明命の耳に入ることには無かったようで、なんの反応も示さなかった。

俺は明命の兄として、できうる限りのことは教えていくつもりだ。それは今までも、これからも変わることはない。

話をしていると少しずつ日が傾いてきたようで、あたりは薄暗くなっていた。

「まだ、寝るには早いかも知れないがさっさと寝ることにしよう。明日には村に帰りたいしな」

「はい、兄上」

俺たちは少しばかり早く眠りに就くことにした。

旅装から宿に置いてあった寝間着に着替える。その際に手ぬぐいで汗を拭いておく。その際には明命も趙雲たちの部屋に行った。流石

に肌を見せ合うのは抵抗があるからな。

体をきれいにした後、直ぐに寝台に横になり眠りについた。賊退治の為に夜中から起きていたのでわりと直ぐに眠りに落ちていった。

翌朝、宿を後にした俺達は賊討伐の報奨をもらい建業を後にした。

趙雲たちも今度は荊州に行く予定だったらしいので途中の会稽まではともに歩いていった。

「しかし、お二人はこのあたりでも有名なですね。【剣鬼の周承・隠密の周泰】の名は噂でよく耳にしました」

「あまり、その名は好きではないのだがな」

俺は剣鬼と呼ばれるのが余り好きではない。そもそも、なぜ剣鬼なのかもよくわかっていないのだ。確かに剣を振るって何人もの賊を斬り裂いてきたが鬼というのはどうなのだろうか。そこまで酷い仕打ちをしたとは全く思っていないのだが。賊などというものは所詮、人から堕ちた畜生に過ぎぬのだから。

「有名になるということは仕官するときには都合がいいと思うのですがー？」

「有名になるにしても、せめて剣鬼という物騒な名前は止めて欲しかったのだ。いくら何でも鬼はないだろうに、鬼は」

「いやいや、周承殿の戦うときの表情は正しく鬼そのものでしたぞ。

背を合わせて戦っていた私が言うのです。間違い有りませぬ」

「背を向けてたのになんで俺の表情がわかったんだ、趙雲」

軽口を叩き合いながら会稽への道中を急ぐ。建業と会稽はそこまで離れていないので二、三日歩き通せば着くだろうと考えていたが、そうでもないようだ。流石に、武官志望でもない程立と戯志才には少々厳しいのだろう。俺たちは七日で着くように進む速度と食料を確保して建業を出た。

途中で休憩や夜に寝るために野営をし、今日で目標の七日目。そして、眼前には会稽の外門が見えてきた。

「ようやく到着ですな」

「なかなか、たのしいたびでしたねー」

「そうですね、皆さんと一緒に旅ができて楽しかったです！」

「周承殿の話はなかなか興味深かったです」

「満足していただけたようで何よりだ」

俺たちは会稽の外門をくぐり、宿を探した。もうすぐ日も暮れそう。で今度は特に用事も無かったため直ぐに宿を目指す。



「では、今回も建業の時と同じ部屋割りでもいいか？」

特に不満も無かったようなので二部屋借りてそこに荷物を置きに行く。

荷物をおいた後、程立が皆で一緒に食事に行こうというので食事に向かった。

食堂で各々が料理を注文した後は談笑しながら料理が出てくるのを待っていたのだが、店の奥が何やら騒がしいことになっていた。

「おい店主！この料理に髪が入っていたぞ！」

「申し訳ありません！直ぐに変えの料理をお出しますので」

「変えの料理なんか別にいいさ。この店の売上を頂いていこうか！」

そう言つて騒ぐ腰に剣を下げた不恰好な男。尊大な態度を取りながらあたり構わず騒ぎ立てている。

あまりにも五月蠅いのと、少々気になることがあったので俺はその男の所に向かった。

「一体何を騒いでいるのんだ。やかましくて碌に会話もできん」

そう言って近づくと、不恰好な男がまた叫び始めた。

「これを見る！料理の中に髪が入っていたんだ！だからその侘びを要求してるのさ」

「だからといって店の売上は渡すわけにはまいりませぬ」

「巫山戯んな！料理に髪なんていれやがって、ココの店じゃ料理に髪の手入れるのが当たり前なのか、ああ！？」

「そのようなことは・・・」

やれやれ、これでは平行線か。そもそも、髪の毛の一本でここまで怒らなくてもいいだろうに。しかも侘びに要求したのが店の売上とはな。

「おい、その辺にしておけ。そもそも、髪の毛が料理に最初から入っていたなんて証明できるのか？」

「当たり前だ！現にこうして入っているではないか！」

そう、その髪の毛が少々気になっていたんだよ。

「この髪の毛、店主のものよりも長いような気がするんだが？」

「な、何言つてやがる！そんなのは多少の誤差つてやつだろうが！」

そう、そういうだろうと思っていたさ。だがな、もっと根本的な違いがあるんだよ。

「しかも、店主の髪の色とも違う」

そう言った瞬間、男が固まった。どうやら、髪の色が違うことに気がついていなかったらしい。

「愚か者が。店主の髪の色は赤。対してお前の髪は黒。こんなことも分からずにそんな詐欺にも劣るような真似をしていたのか」

「・・・ぐっ！うるせえ！こうなったら剣鬼と恐れられた俺の実力を見せてやる！」

その瞬間、今度は店の中の温度が下がる。

「どうした、ブルって声も出ねえのか？」

下卑た笑みを浮かべながら腰に差していた剣を抜く男。

「いい度胸だ、この会稽でその名を語るとはな」

俺は男の背後に回るとそのまま首筋に手刀を叩き込む。男は何をされたのか分からなかったようで、そのまま地に伏していた。

「剣鬼の名に未練も愛着もないが、貴様のような奴には譲れんよ」

そう言つて、俺はその場を後にする。店主は何やら礼を言っていたようだが、俺はその言葉に軽く、気にするな、と返し四人のもとへ戻った。

ゴタゴタはあったがそのあとはつつがなく食事を済ませ、そのまま俺たちは別れることとなった。別れ際に趙雲が真名を預けようとしていたが、俺はまたあったらその時に預けてくれ、と言つてそのまま見送った。

「さあ、俺たちも村に帰るとしようか」

「はい！」

俺たちも会稽を後にして、自分たちの村へと戻っていった。

## 9 話（後書き）

11/9/16：細かい設定を修正

閑話1 曹操編1（前書き）

久しぶりに更新して、閑話を入れるというのはどうなんだろう。  
お久しぶりです、風雅です。  
春蘭は愛すべき馬鹿。

## 閑話1 曹操編1

まだまだ日差しが強い夏のある日、陳留の太守、曹操は自室にて書簡と戦っていた。

「それにしても多いわね。何時ものことなのだけれど」

「仕方ありません。未だ人材不足なのですから」

答えるのは曹操が最も信頼を置いている双子の片割れ、夏侯淵。彼女も曹操の隣で書簡の整理をしていた。

「春蘭がもう少し文官としての仕事ができればまた違うのでしょうか」

「姉者に頭を使う仕事を任せても、我々の仕事が増えるだけでしょう」

夏侯淵の言葉に曹操は頭を抱える。

「まああの子には文ではなく武に期待しましょう」

「それがよろしいかと」

そんな会話をしていると中庭の方で何やら大きな物音がした。音の大きさからすれば、いつものように夏侯惇がなにかを壊したのかとも思えたが、どうにも様子が変だった。城の中が物静かなのだ。

「静かすぎるわ。一体どうしたのかしら」

「私が見て参ります。華琳様はここにいて下さい」

「任せるわ、秋蘭」

曹操に一礼するとそのまま出ていく夏侯淵。部屋を出ていった彼女の背中を見送った曹操は何があつたのかを考え始めた。

可能性として最も高いのは何者かの侵入を許し、そいつを春蘭が迎撃していること。だけど、それならば誰かが私の所に報告に来るはず。では、なぜ私の所に誰も来ないのか。もうひとつの可能性は城の人間が全員殺されてしまったか。これも可能性は低い。誰も私の所に報告に来る間もなく、城の

人間を全員殺すことは不可能だろう。では、一体何だというのか。

曹操が思考に落ちていると、夏侯淵が部屋に戻ってきた。

「華琳様、ついてきて下さい！」



夏侯淵の言葉に曹操は立ち上がり、己の得物である大鎌、絶を持って彼女と共に中庭まで向かった。

「何があつたかわかったの、秋蘭」

「はい。ですが、口で説明するよりも実際に見ていただいたほうが早いかと」

状況の説明をしない夏侯淵。さすがの曹操も何があつたのか全く理解できなかった。

秋蘭が碌に報告もせずに見せたほうが早いという。何か説明しにくいことでもあつたのかしら。

少しずつ物音が大きくなる。耳に届くその音は正しく剣戟の音。詰まる所が戦いである。

目的地に到着した曹操が見たものは、夏侯惇と剣を交える黒い服を纏った男の姿だった。

街に着いたのは昼前の事だった。旅もようやく終わりに近づき、もう直ぐ生まれ育った村に帰れる、そんなことを考えながら、俺は食堂へと向かった。

中に入って席に着き料理を頼む。久しぶりの普通の食事に少しばかり奮発しようと何時もよりも多めに料理にする。

料理を頼んで、水を飲みながらゆつくりしていると、外で騒がしい声がした。また、柄の悪い奴が何か馬鹿げたことでもやっているのだろうと思うと、なぜか男の方から悲鳴が聞こえていきた。

少しかかり気になったので一旦店の外にでて様子を見てみる。外に居たのは大剣をもって走りまわる女の姿と、追いかけてられて逃げる賊のような男だった。俺は少しかり目眩がしたが、さして気にするものでないだろう、と店の中に戻ろうとしたのだが、なぜか追いかけている女と目があってしまった。

目を離そうとしても彼女は俺から目を離してはくれなかった。一体何だというのか。

「何か私の顔に付いていますかな？」

「貴様、何者だ！」

そう言っ*て*いきなり剣をふりあげて襲ってくる女。本当に何だというのか。

「一体、なんのつもりだ。こんな町中で剣を振るい、更に他者に危害を加えようとするとは！」

「何を言っている！貴様等賊のほうがよくばど危害を加えようとしているではない！」

なるほど、つまり俺は賊と間違われているわけか。巫山戯るな。

「寝言は大概にしろ、小娘。直ぐに剣を下ろすならよし、下ろさぬならばそれ相応の覚悟をしろ」

「ふん、貴様ごときの言うことなど聞く耳持たぬ！」

いきなり大剣を振り下ろす女。流石に俺も得物を抜かないと厳しいと思*い*魂切を抜き放つ。

ぶつかり合うお互いの得物。だが、相手の力もなかなかのもので、そのまま鏢迫り合いになる。

「私の剣を止めるとは、貴様、なかなかやるな！」

「ふん。小娘ごときの剣も止められぬようでは、旅などできぬよ」

実際はそんなことはない。女の振るう剣であるはずなのに、受け止めた俺の手はかなり痺れている。得物を握り落とすほどではないとしても、この状態は馬鹿に出来ない。相手はそんな様相を見せていないのだから。

「どうした！威勢が良いのは口だけか！」

「あまりの馬鹿力に少々驚いただけだ。この程度では話にならんよ」

「減らず口を！」

そのまま一気に体重を掛け、俺を押し込もうとしてくる。あまりに強い勢いで押されたため、踏ん張ることが出来ずにそのまま押し込まれてしまう。

「そらそらそら！」

「クッ！」

流石に背に壁を負うと避けることもままならなくなるので、力比べは止めにすることにした。剣を握る手の痺れも引いてきたので、一度力強く踏み込んで相手の動きを抑えた後に一気に相手を蹴って距離を置く。

「なんだ、逃げることしかできないのか？」

「そんな安い挑発に乗るとでも思っているのか、デコ娘」

「な・・・貴様ア！！」

俺の挑発に乗った女はそのまま突撃してくる。力比べでは分が悪いのは明確なので相手の剣戟をすべて剣の刀身を滑らすようにして受け流す。力だけの一撃など受け流すことはたやすいのだ。

「どうした、その程度の技量では俺は倒せんぞ」

「グッ・・・おのれ、言わせておけば！！」

女が挑発に見事に乗ってくる。ここまで見事に乗ってくる奴はなかないないのだが。純真と言うか単純と言うか・・・冷静さが圧倒的に足りんな。

もう一度剣を構えて向かってくる女。もう一度受け流してやろうと

俺は身構える。

「これは一体何事か！」

いきなり発せられる凜とした、それでいて覇気の溢れる声を聞いた俺は思わずその声に注意を取られた。女のほうも注意を取られていたようで命拾いをしたが、問題はその後だった。俺の注意を引きつけたのは金色の髪をした少女の声だったのだから。

「この曹孟徳の治める街で狼藉とはいいい度胸ね。覚悟はできているのかしら？」

そして、その女の子こそが、俺が会おうとしていた人物、曹孟徳だったのだから。

華琳様の発せられた声に思わず体が止まってしまった私はさっきまで戦っていた男の方を確認する。戦いの最中であつたのだから意識がそれたのは非常にまづかつたからだ。だが、幸いなことに男のほうも華琳様に注意を取られていたようで、不意をつかれるようなことは無かつた。

「華琳様、街の中に怪しい男がいたので捕らえようとしたところ抵抗したので・・・」

「いきなり剣を向けられれば、誰だって抵抗するだろうよ」

「五月蠅い！貴様はおとなく捕まればいいのだ！」

「何もしていないのに捕まえられてたまるものか」

全く、男のくせに御託を並べおつて……。どうせ、コイツは悪人なんだ。明らかに怪しいし。

「何処からどう見ても怪しいだろう。黒装束に背中に剣なんぞ背負いよってからに」

「見た目で人を判断することはオススメしないな」

クソ、言うこと全部に反論して来おって・・・。

「やめなさい。そんなくだらない言い争いを聞きに来たのではないのよ、春蘭。この男が怪しいのは間違いないけれど、何かをしたわけではないのでしょうか？ だったら捕らえることなどできないわ」

「しかし！」

私は華琳様に、この男の危険性を示そうとしたが

「黙りなさい、春蘭！何もしていない者を捕らえでもしたらいい恥さらしよ！」

「グッ・・・分かりました」

華琳様に一喝されてしまった。私は怪しい男を捕らえようとしただけなのに・・・。



春蘭を黙らせた所で、やっとこの男と話をする事ができるわ。春蘭ももう少し頭が良ければ・・・残念だわ。

「さて、済まなかったわね。私の部下が迷惑を掛けたわ。我が名は曹孟徳。この街を治めている者よ」

「お初にお目にかかります、曹孟徳殿。私は周承、今は訳あって大陸を旅しております」

周承、何処かで聞いたような……。まあいいわ、この男は間違はなく強い。春蘭と互角に戦える武は非常に惜しい。

「では周承。一体これはなんの騒ぎなのかしら。大体の見当は着いているけれど確信が持てないの」

周承に説明を求める。これである程度の知をはかることにしましょう。

「簡潔にまとめるのであれば、そこにいる女にいきなり剣を向けられたといったところですか。食事の前で私も気が立っていましたので思わず挑発してしまい今のようになっしまいました。曹操殿の領地で争いを起こしたことにはお詫び申し上げますが、彼女が原因であることはそこにいる兵士達が証明してくれるでしょう」

「そう、わかったわ。この娘も仕事熱心で悪気があったわけではないでしょう。そうよね、春蘭？」

「は、はい。華琳様」

「そういうことで、許してもらえるかしら周承？」

「ええ、私の方にも非がありましたので」

「そうしてもらえると助かるわ」

なかなか、知の方もありそうね。今の受け答えを見ても私の覇気を受けながらも怖じけづくこともなく言葉を返してきたところから考えても、優秀な将になりそうだわ。

「ところで周承、私に仕える気はないかしら？貴方の武と知、在野に捨ておくには惜しい物があるわ」

「そんな、華琳様！こんな男など居なくても、私と秋蘭だけで大丈夫です！」

「わかつているわ、春蘭。でもね、今後大くなる私たちには優秀な将は何人いても足りないくらいなのよ。理解しなさい」

「は・・・はい」

「さて、周承。どうかしら、私の元に来る気はない？」

さて、周承はどんな反応を見せてくれるのか楽しみだわ。

まさか、曹操殿に引き抜きされることになるうとは思わなかった。少しばかり話をして、あわよくば客将として金稼ぎが出来ればいいかと思っていたのだが・・・引き抜きは少しばかり遠慮したいものだ。

「曹操殿。仕官の件に関してはお断りさせて頂きます。客将であれば構わないですが」

「そう、理由を聞いても？」

凄まじい覇気だな。俺を試そうとしているといったところか。いいだろう、その挑戦、受けてたとう。

「理由としては今は仕官する気はないからの一言につきます。私は大陸を旅しているわけですがその目的は己にあった主を探すため。今はその旅の途中で有り、今、曹操殿に仕官すれば他にあったかも知れない道を閉ざしてしまうかもしれない。今はまだ仕官の時では

ないと考えます。故に客将であれば、と条件をつけさせて頂きます」

「そう。もし、私が断って他に目ぼしい主も見つけられなかったならばどうするのかしら？ちなみに、私が一度断るということはもう二度と登用することはないと思ってもらって構わないわ」

「ならば、曹操殿がその心情を覆す程の功を立てて、引き抜きさせて見せましょう」

一瞬の睨み合いの後、曹操殿は大きな笑い声を上げた。

「面白いわ、周承。貴方のその言い分と、意気込みを汲んで客将として雇いましょう。貴方の活躍に期待しているわ」

「よいのですか、華琳様。腕は立つとはいえ、男を迎え入れるというのは・・・」

「いいのよ、春蘭。それに秋蘭も納得してるみたいよ？」

「ええ。姉者と切り結ぶ武といい、華琳様と舌戦を行った時の心意気といい、きっといい将になるでしょう」

「そういうわけで、よろしく頼むわよ、周承」

「こちらこそ、よろしく頼みます曹操殿」

こうして俺は曹操殿の客将になった。



## 10話（前書き）

今回は何時もより少し短いです。

ブランクが長くなるとやっぱりうまく書けないものですなあ…。

## 10話

周承達が賊の討伐から村に戻ってきて早くも一週間が過ぎた。兄から大切にされていた剣を託された周泰は、兄の思いに負けないようにと一心に修行に明け暮れており、周承もまた使い慣れていた愛刀を手放したために、今までに培ってきた勘を取り戻すために剣を振るっていた。

上段からの素振りを千本。正眼からの横薙ぎを左右あわせて二千本。下段の切り上げを千本。これが何時もの周承の素振りによる剣の基礎鍛錬である。

「やはり、魂切ほど手になじむことはないか」

少しばかり寂しそうな顔をするものの、その目には今握っている剣のみが映し出されている。その剣は周承たちの父が残したもう一振りの家宝の剣、銘を暁キョウという。明命に渡した魂切とは特に関連性があるわけではなく、この剣自体は他にもう一振りの対となる剣があるという。詳しくはわからないが、この剣を使いこなすことができるれば自ずと見えてくるというのが、村の長老が父から聞いた話だという。いつか、その対となる剣を見つけられるようになるためにも今は、この剣を扱いこなせるように鍛錬あるのみである。

剣を振るうこと凡そ一刻。流石に疲れてきたのか、剣先がわずかながらにブレ始めていた。本人も自覚していたようで、これ以上の鍛錬は無意味と感じたのか、剣を鞘に収めると持ってきていた手ぬぐいで汗をぬぐっていた。



汗の処理も終わり、家へ戻ろうとしたが、ふと何処からか何者かの気配を感じた。賊が放つような隠すこともない怪しい気配ではなく動物の気配でもない、こちらを観察しているような気配。少しばかり気になった彼は、その気配の放つ元へと声を掛けた。

「そこに誰か居るのか？居るのならば直ぐに出てこい」

すると、茂みの中で何かが蠢きそこから何者かが飛び出してきた。

「失礼いたしました。私は関羽、字を雲長と申す者。各地を旅して回る武者だ」

出てきたのは黒く美しい髪を横にまとめてくくって、青龍偃月刀を携えた生真面目そうな女だった。

「私は周承と申します。して、武者殿は一体何用でこのような山奥に来られたのかな？」

「恥ずかしながら妹とはぐれて道に迷ってしまっただけ。山の中を彷徨っていたところ貴殿の鍛錬を見かけたもので、失礼だと思ったがそのまま見学させてもらっていた」

おそらくは嘘ではないのだろう。このあたりは山間地で山もなかなか

かに多く、一度入ると迷い込むことが多い。地元の間でもたまに迷いこむほどのだから。

周承も警戒を解き、彼女の方を向いて友好的に話しかける。

「そうでしたか。ならば私もこれから家に戻るところですので、麓の村までご案内致しましょう。それから、妹君を探す手伝いをさせて頂きましょう」

「かたじけない。よろしく頼む」

そう言つて彼女は周承に頭を下げる。周承は側に立てかけていた暁を拾い、腰に携え直すと関羽ともに村へと戻った。

「愛紗ー！愛紗ー！」

鍛錬を終えた私は村に戻る途中で誰かを呼ぶような声を聞いたので、その足でその声の出元へと向かいました。

「まったく、愛紗はどこにいったのだ。鈴々に気をつけろといっていたのに、自分が迷子になってちゃ仕様がないのだ！」

誰かに悪態をついているような様子でしたが、その声色から怒りの色は感じられず、名前の人物を心配しているかのような様子が伺えました。

「早く見つけないと、愛紗が行き倒れてしまうのだ。鈴々が頑張らないといけないのだ！」

気合を入れ直す女の子の姿を目視できる程の距離にまで近づいた所で、私は少女に声をかけることにしました。

「あの、どなたかお探ですか？」

声をかけると、女の子は私の方に向かってやって来ました。

「お前は誰なのだ？」

「私は周泰、麓の村に住んでいる者です。誰かが大声を出しながら歩いていたので思わず声をかけてしまいました」

「鈴々は張飛なのだ。実は、山の中で姉者とはぐれてしまつて探していたのだ」

なるほど。姉と山の中ではぐれてしまったということですか。ですが、立ち振る舞いは明らかに武人のそれ。おそらくはこの子の姉もまたかなり腕のたつ武人なのでしょう。山の中ではぐれてしまったとはいえ、そうそうすぐに倒れたりはいしないでしょうから、村に戻り兄上に相談することにしましよう。

「張飛殿、ここでウロウロしていても埒があきません。一旦、麓の村にいつて人を集めて皆で探しましょう。もしかしたらお姉さんも先に村に向かっているかもしれませんので」

張飛殿は少しばかり考えるような素振りをされた後、笑顔で答えました。

「そうするのだ！鈴々も一人だけじゃ探すのが大変なのだ！」

「では、村まで行きましょう。案内します」

そして私は、張飛殿とともに村に戻りました。村に戻ってから、村の人達に彼女の姉の容姿を伝える為に話を聞いていると、鍛錬を終わられたのだろう兄上が山から降りてきていました。その隣には何やら青龍偃月刀を持った女性が隣にいて、兄上と何やら話をしながらあるいておられました。

その姿をみた張飛殿が女性の姿を見つけた瞬間、いきなり大声を出されました。

「あーッ！！愛紗なのだ！！」

どうやら、彼女の姉が見つかったようでした。

「鈴々、ココにいたのか！探したんだぞ！」

関羽殿が明命と共にいた少女に叫ばれてから返した言葉である。おそらく、あの少女が彼女の妹君なのだろう。あどけない顔をしているものの、その所作の一つ一つが武人のそれ。おそらく、明命もそれは感じ取っているだろう。関羽殿自身も相当な手練。もしかすると、あの夏侯惇と同等以上かもしれない。世の中とは広いものだ。

関羽殿が少女の元へ駆け寄ると、彼女は大声を上げて何かを言っているようだった。

二人が再開しているなか、明命は俺の方へやって来ていた。

「感動の再会といったところでしょうか」

「そうだな。まさか、こんなに直ぐに再会させられるとは思わなかったが。これは良い誤算だったな」

「そうですね」

ここで再会させることができたのはなかなか僥倖だった。如何せん地元の人間だとは言え、山の中にしかも人を探しに入るといのはなかなか危険度

が高いし、見つけることができる可能性も低い。本当に良かった。

「どうやら再開できたようでよかったですな、関羽殿」

声を掛けたのに気づいたのか、関羽はこっちに向き直り張飛とともに頭を下げる。

「無事に妹と再会することができた。感謝している。」

「お兄ちゃん、ありがとうなのだ！」

「なに、構いませんよ。困ったときはお互い様、というやつです」

二人の感謝に笑顔で返す。

「今晚はココに泊まっていくといいでしょう。幸いなことに部屋は余っているし、たまには客人を招くというのも良いものです」

まあ、わりと短い間に色々な人に会ったがな。孫策殿などはその最たる例であるし。

「よろしいのか？流石にそこまで甘えるのはいかなものかと思うのだが…」

「構いません。何時も二人だけで少しばかり寂しく思っておりましてから」

「だったら泊まっていくなのだー！」

元気のよい張飛の言葉で二人の宿泊が決定した。少しばかり意外なことがあったといえば、小さな体に見合わぬほどに大飯食らいな少女が居たということぐらいなものか。

「…張飛殿は本当によく食べられますな」

「…申し訳ない」

「もっと食べるのだー！」

「たくさん食べてください！」

何時も周家の調理を担当している周泰が料理を作っては運んで、作っては運んでいるのだが張飛の食事の勢いは半端なものではなかった。

その日の晩の食事で、周承の家に蓄えられていた二日分の食料は綺



麗サッパリ無くなった。

宛てがわれた部屋に向かい鈴々と共に寢床に入り、私は今日あったことを思い返していた。

なんというか、色々と周承殿には顔向けできないな。はぐれてしまった鈴々と再会することができた上に一晩の宿まで提供してくれるいう。寝る場所も確保できておらず、今晚は野宿を覚悟していた私達にとっては渡りに船であった。

周泰殿の作る食事が出てくるのを待っている間、周承殿と話をしていたのだが彼もまた各地を旅し、己の仕えるべき主を探していたと

いう。今は生まれ育った村を守るために帰ってきたというが、誰か目ばしい人物は居ないかと聞いて見ることにした。

聞いてみればやはり、私が思っているような人物ばかりが上げられた。曹操、孫堅、馬騰、董卓…上げればきりがないが、何れも私の思うところの主になれるようには思えなかった。特に、覇道を目指しているという曹操とは私は相いれることはないだろう。

曹操の覇道に貢献すること、それは偉大なことだろう。だが、私はそれをしたとは思わない。覇道を進むということはそれ相応の犠牲を出すという

こと。争いを争いでもって抑えこむということ。私は力を誇示したいわけではなく、か弱き民が安心して暮らせるような世を作ればそれでいいと思っている。そのためにも曹操が示す覇道ではなく、仁をもって徳となすような御方と共に、世を正していきたいのだ。これは鈴々も納得してくれたことである。

しかしながら、周承殿の話はなかなかになることが多い。旅の途中で如何にして路銀を稼ぐということと、その土地の主たる人物を見極めることを同時に行う方法としてまさか客将になって過ごすとは、流石の私も思わなかった。いや、考えはしていたが客将というものがそう簡単になれるものではないと心の奥底で決めつけていたのだろう。

それにしても、出会ったときにしていた鍛錬。あの様子から察するに相当な実力を持っていると見受けられる。是非とも手合わせして、己の力量を高めたものだ。明日の朝、出立する前にでも頼んで見ることしよう。おそらくは妹の周泰殿も実力者であろうから、鈴々と手合わせしてもらうのもいいかもしれない。何時も私としか手

合わせることがないからな、きっといい刺激になるだろう。

そんなことを考えながら、昼間の疲れもあったのかそのまま深い眠りへと落ちていった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4883w/>

---

周承伝 - 剣鬼が往く -

2011年12月27日22時49分発行